



門名  
336  
4

本  
元  
濱  
町

成田參詣記卷四目次

佐倉佐倉城

八幡社

海隣寺

古文書 千葉氏遺物 常陸木像 貞胤木像 永祿八年阿弥陀木像識 太鼓

佐倉佐倉故城址

千葉系圖二種

萬千代殿屋敷

長勝寺

福徳二年鐫

清光寺

大樹寺殿御齒骨墓 正安二年阿弥陀銅像識 古硯 無歳月觀音銅像識

天保三年

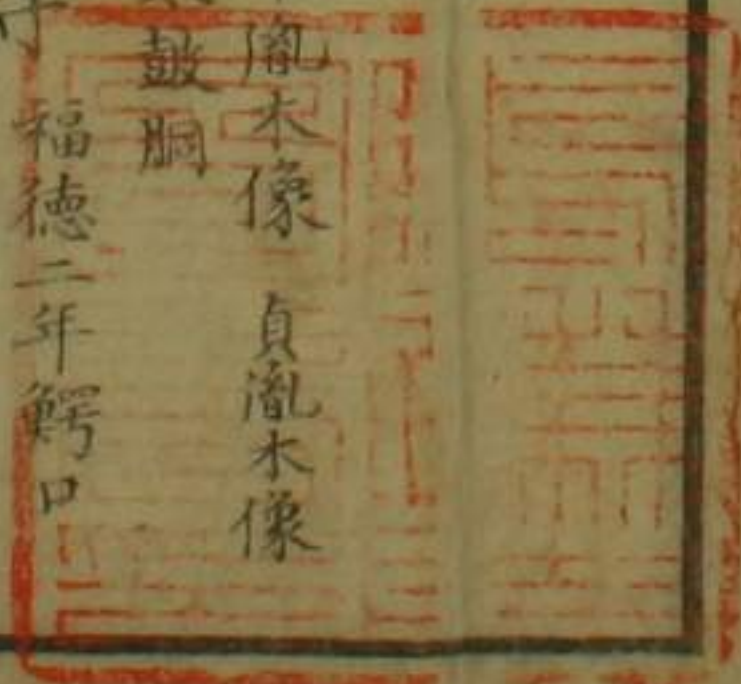
勝胤寺

千葉氏遺物

淨泉寺

應永二十二年雲版 天文廿三年觀音像

古文書





成田叅詣記卷四

佐倉城

印播郡鹿島山あり

今の城地と鹿島郷と云ふ古きこゝ見え

街坊六町

田町新町弥勒町本町

江戸より十三里十八町餘

天正十六年七月千葉介邦胤

卒十一月北條氏政

こゝらひ小て新館と此地小營之邦胤の長女

東として居しむ家臣中村雅樂介に此小傳く同十八年七月小田原

城の後嗣子重胤流落し東へ大府の後宮小仕ふ是歳八月小久野

三郎右衛門尉宗能封せしむ民部小任宗能率して子民部少輔宗秀

嗣く慶長七年宗秀封と遠江の國久野小轉し廢城となり同十六年

土井大炊頭利勝改め築く元和元年城溝功成て移居は是より本州

要鎮の治城と云々

幡社

大佐倉村小あり

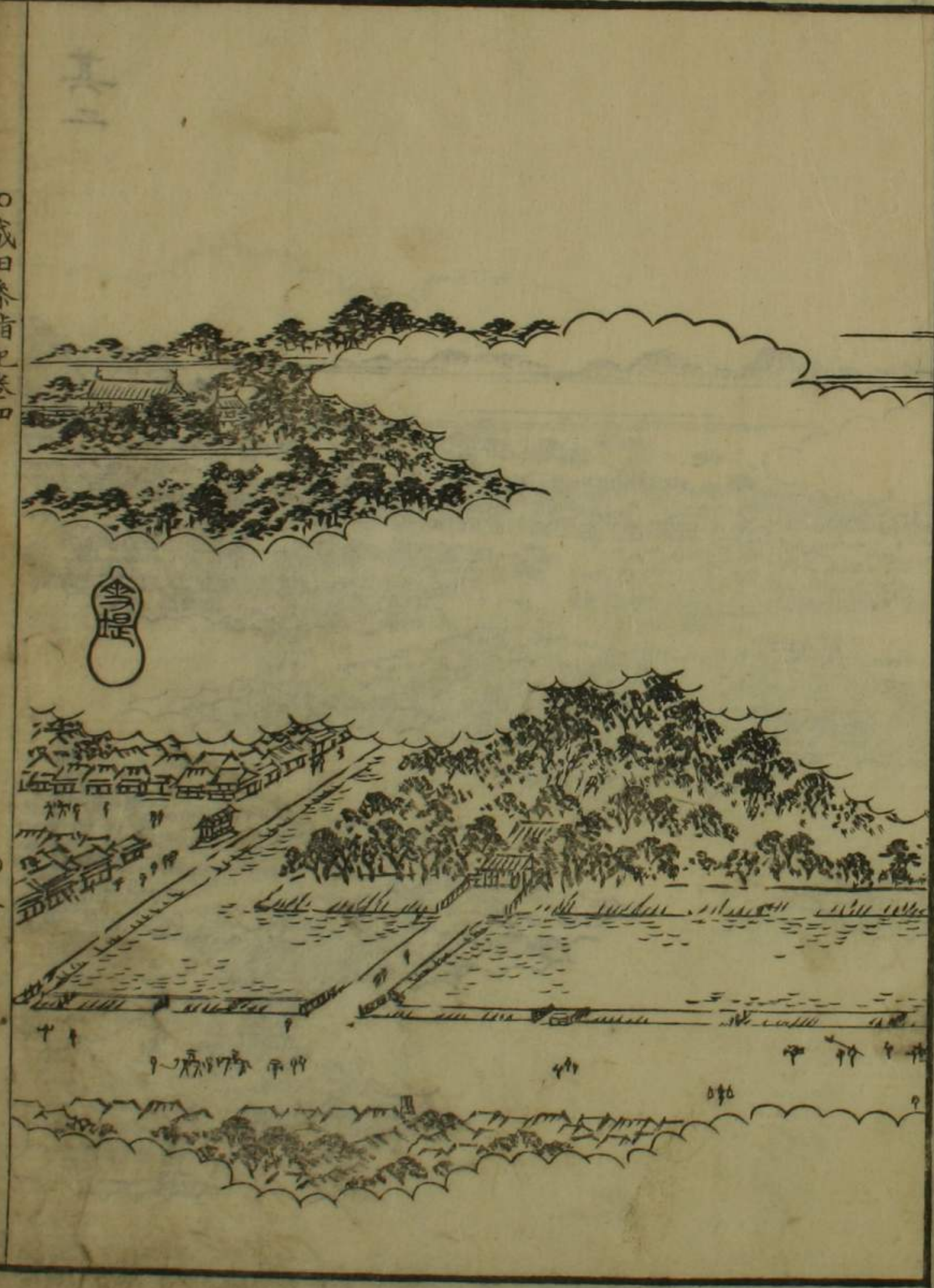
社領廿石

天正十九年

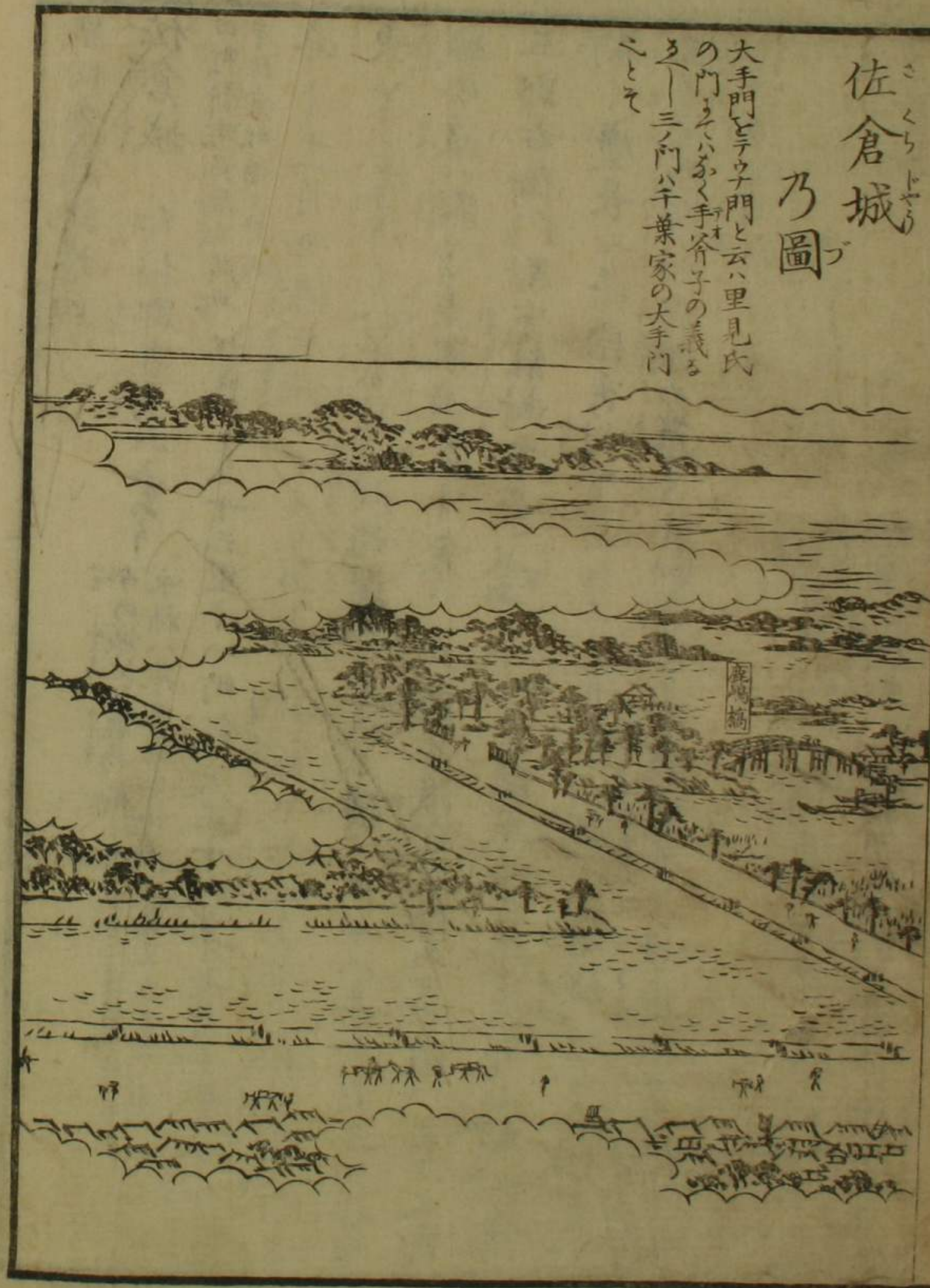
社の傳詳ならぬ八月十二日

の祭祀あり此日酒々井へ神幸競馬の祭あり別當と大櫻山寶村





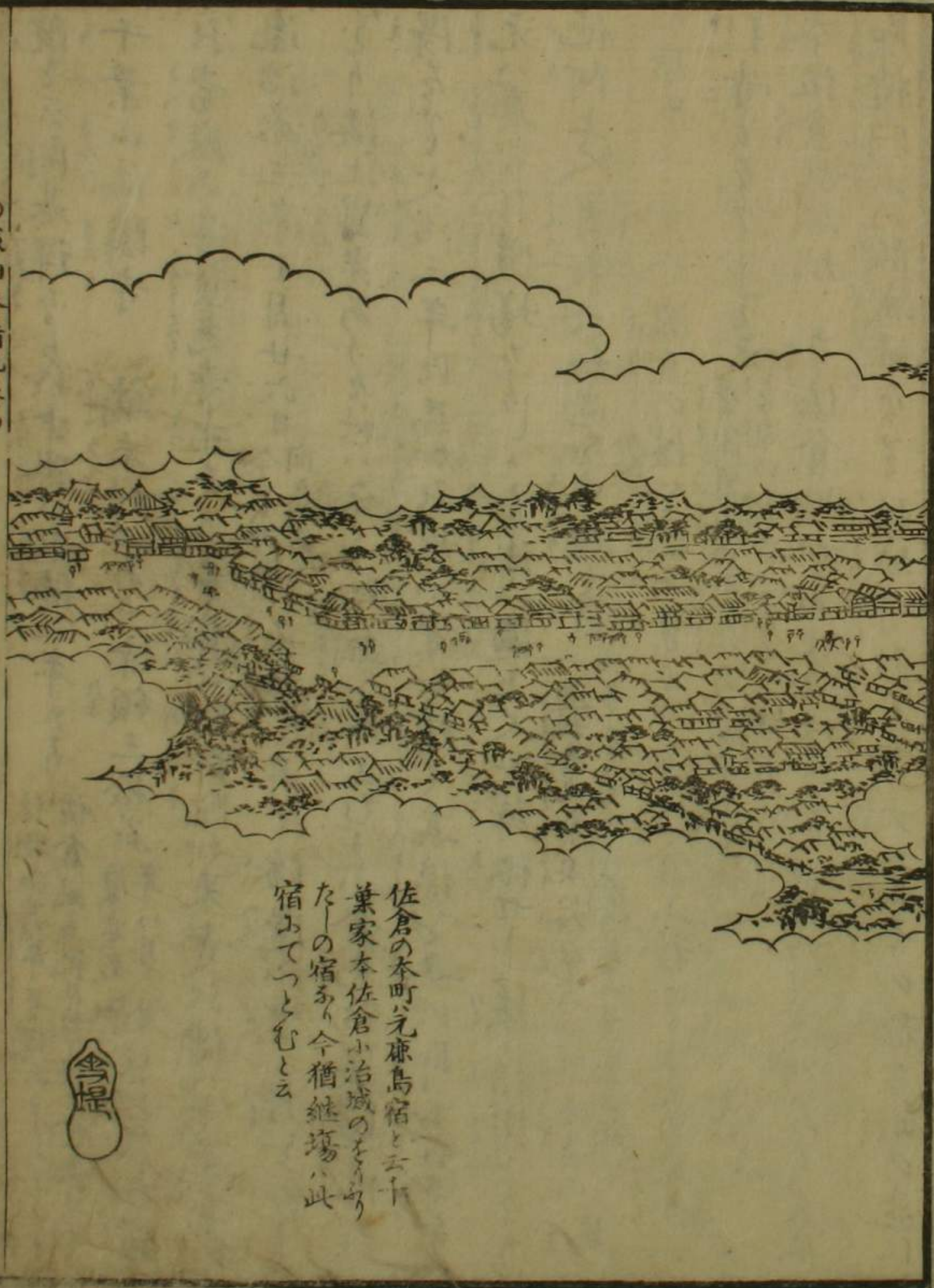
佐倉城さくらしろ  
乃圖のづ  
大手門おおいでと云々門と云々と云ハ里見氏  
の門のと云ハ手斧てお子の義の  
と云ハ三ノ門さんハ千葉家の大手門  
ことそ







佐倉の本町元康島宿と云々  
葉家本佐倉小治城のそり  
たの宿あり今猶継場ハ此  
宿おてつとむと云





院と云開基詳ならん中興ハ永徳三年なり  
 千葉山海隣寺 鑄木村にあり寺領三十拾石 慶安元年八月 時宗にて相撞  
 此當麻山急量光寺末なり本尊ハ阿彌陀如来寺に傳ハ千葉介者  
 胤治承三年七月廿六日 今此日不 子孫と具シ海邊不出て月と歎シ  
 をり海上異光あり々此ハ命じて細と打志むる小金色此阿彌陀像殘  
 得たり文治三年に馬加地小寺と建て其像と安ん即ち此寺あり  
 元ハ真言此道場なりしハ貞胤一編上人と歸依せし後ハ時宗となり  
 他阿上人真教大和尚と中興と云 一過松壽丸智真ハ伊豫の河野通庵の馬  
 加康胤千葉介胤直の後と受千葉より本佐倉小移りしをり此地小  
 引寺となりと云 幸胤貞胤の景像あり古五寸許り  
 本佐倉故城址 本佐倉根古屋地地にあり 根古屋と昔ハ冊と云奉徳  
 即將門山の故城址なり 此城昔おさまハ大手ハ今の穢多町の邊に

海隣寺所蔵文書

同千葉氏遺物

箱識  
 千葉氏の文法

紫銅覆輪り地ハ鉄ナリ

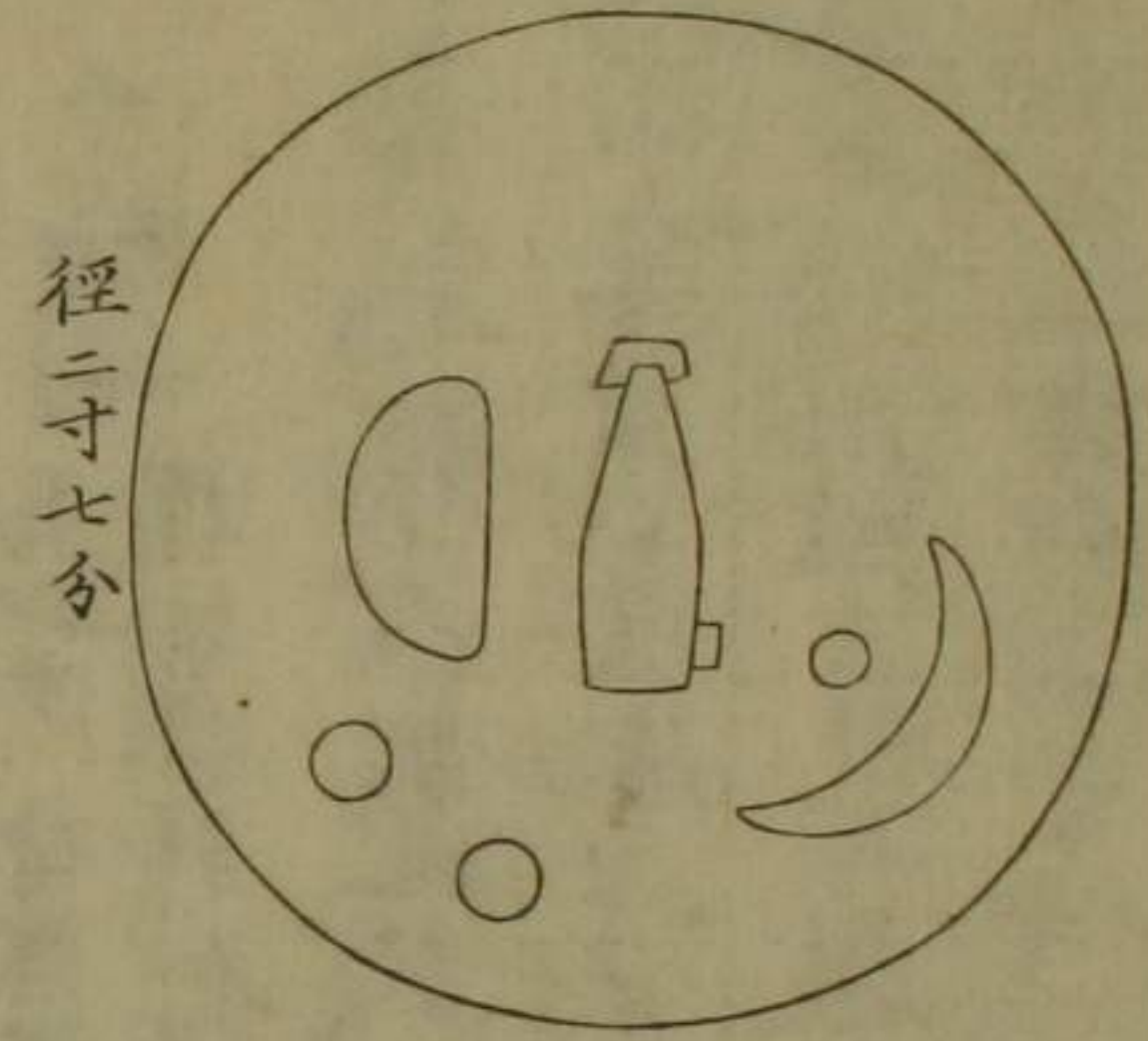


徑二寸七分

奉寄進海上月越如來  
 不總圖 馬加御付障佛 事  
 楮田保神館  
 右意起者大長地久御願  
 圓滿殊平身胤常一形  
 决言成就故奉寄進如如件  
 延文五年卯月廿日 富内大痛  
 光胤

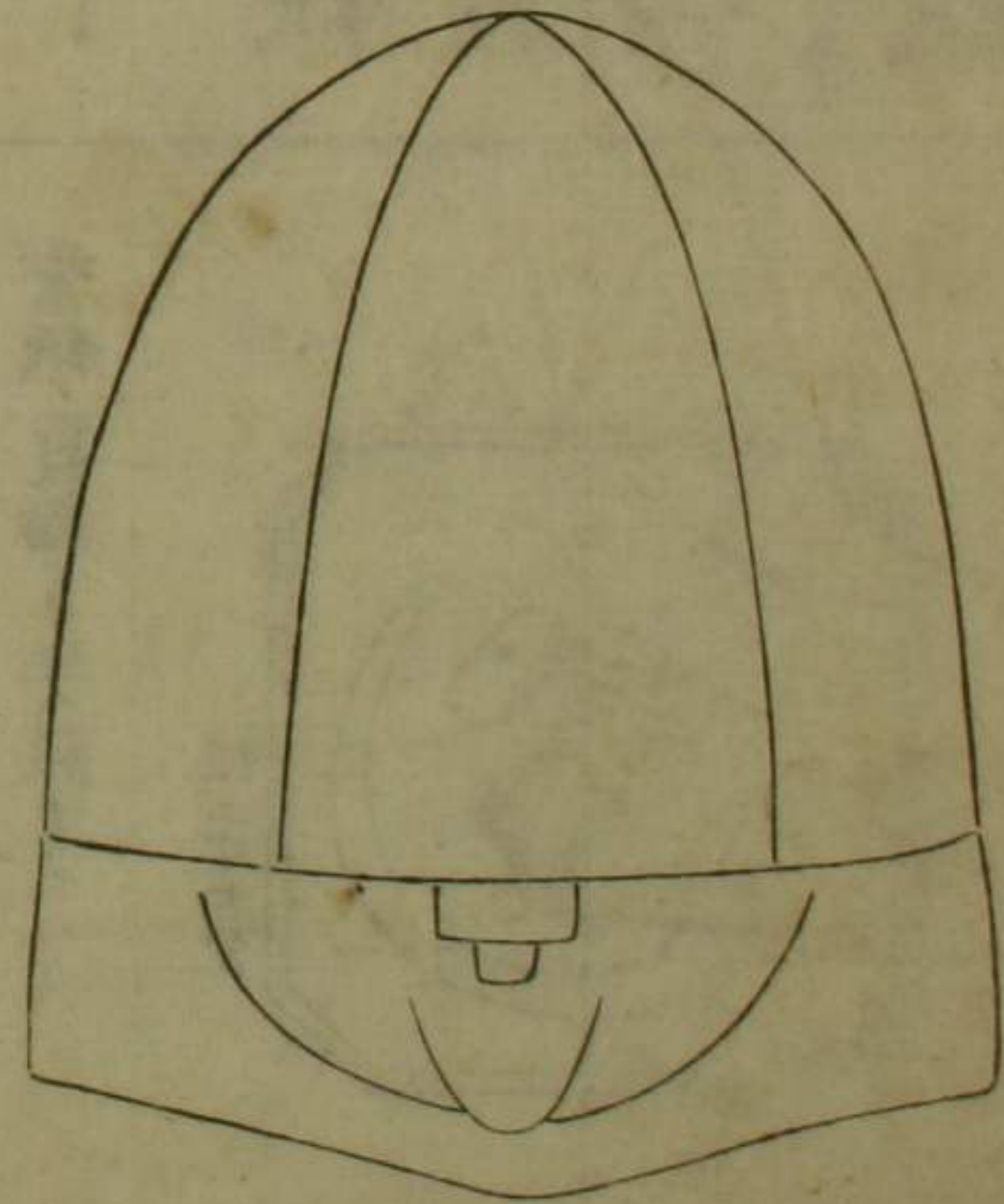


同鐵鏢



徑二寸七分

同兜



外ニ鏡五面方鏡一 裏ニ月星紋アルモノ 亀形アルモノ  
杯ニ一亀雀形ハ尉ト姥ノ形アリ 霍亀ハ千葉ノ別紋ナリ

同寺千葉介常胤肖像丈ケ八寸

又貞胤像ト云アリサド 面貌同シテ  
辨知シカタシ只両手ハナルニミ





敬白  
奉刻彫阿弥陀

如來并二菩薩像  
厥造像意趣者  
平朝臣親胤眼

阿弥陀佛爲煩證仏果之  
爰以則離三有繫縛キ女  
執速至安養無垢淨刹  
無疑者ヤ仍法界普利  
下総国印東在佐倉  
長徳寺開山眼阿

佛仰淨慶

于時永祿八年乙未七月十四  
於康嶋御印播郡  
彫之

以上同寺持佛阿弥陀如來木像識  
文全尺二寸

千葉介貞胤肖像

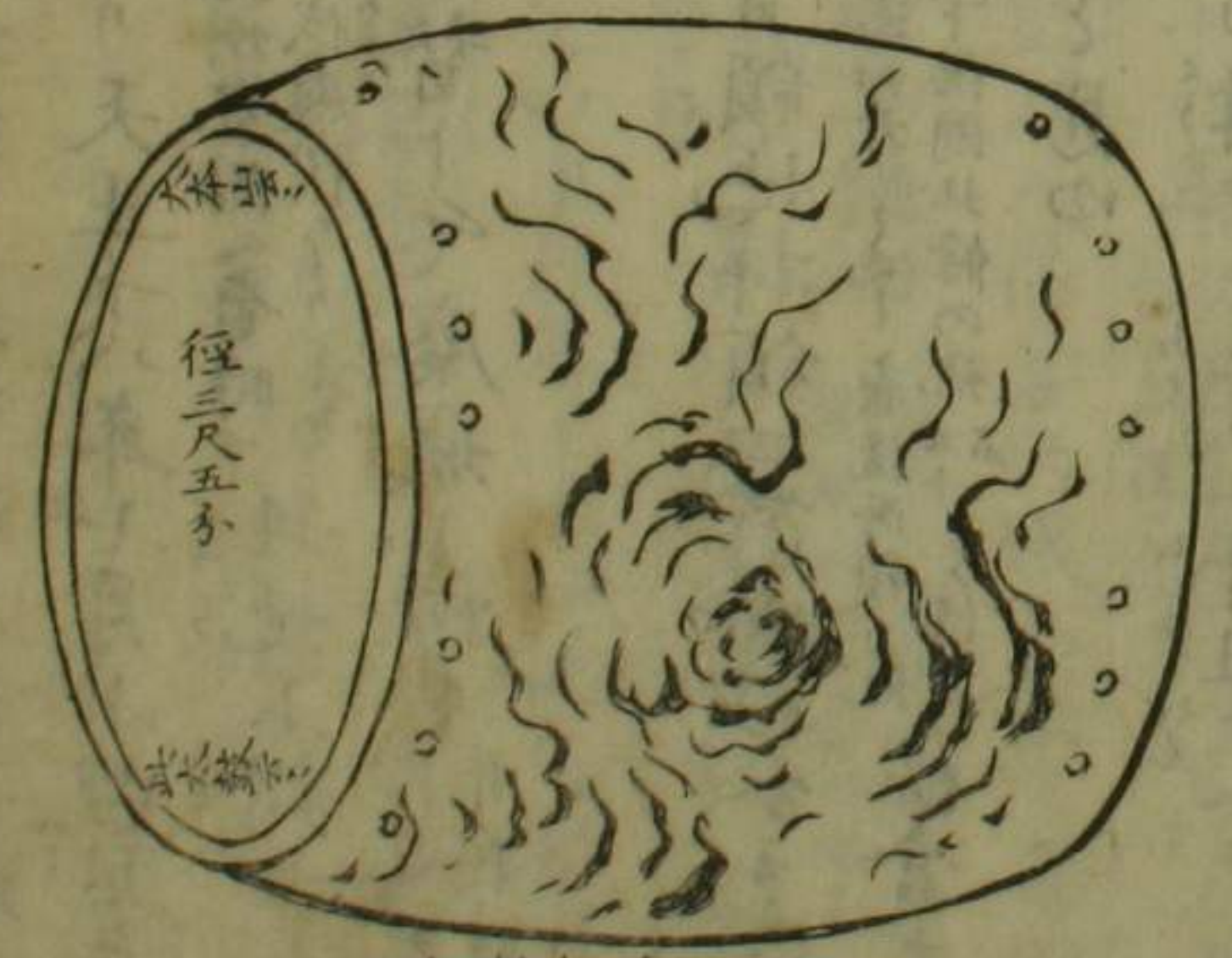


同寺藏太鼓胴

大本山箱州無量光寺ニ而四十一代  
當寺從中興七世

本蓮社欣譽他阿  
尊海上人代

此太鼓之木者御城主  
稻葉丹後守様將門山三  
壹丈壹尺五寸廻之松木  
被下是ニ而掘申候  
宝永三丙戌歲六月日



小又松木



二の門今神明社の華表所なり長祿中馬加康胤乃子輔胤千葉  
より此小移りしを九代重胤小玉り天正十八年七月小田原と共小城  
陥り八月久野三郎左衛門尉宗能今紀州家附之者時ハ此地小封せらるる  
年中子民部少輔宗秀遠州之野へ所替して廢城とす後慶長十四年土  
井利勝此地小封  
七社鹿島地小改め  
集り今佐倉城社

○房總治乱記小天正十八年八月九日領地拜領四箇國の分を佐倉三

監物受次一石佐倉之内本多德藏ハ佐倉の内蓋印を之ノ康後所領の地佐倉之内三郎

左衛門宗能任民部一石佐倉之内山本帶刀頼重と見ゆ

○將門山の地ハ承平の昔一平の將門の構せし址なり普通本今昔物語和朝

十四小時將門今舍弟將頼將平安房守興世執事佐倉太郎以下七百

餘人と引具し後行方と尻目にふらんで勝つたる秀郷九千餘人

小舎釋もくけあせとある輔胤其

故址小よりなる也

○關東古戦録に下總國印播郡佐倉の城主今本佐倉千葉介胤富往乙

酉天正十三年の歳五月七日逝去紀年語子息新助邦胤二十六歳小て家

督と所今既小四年と経たり天正十六年房總治乱記十三年ハ戊子正月初

旬新正嘉儀として旗下の士大将六人佐倉城へ来て毎例の如く

礼式と整へ書院小於て饗應あり時小鎌田鎌田ハ鎌田の誤を多シ治乱記諸

万五郎と之近習の冠者ハ八歳治乱記廿なり配膳と勤る間に放屁

とるる兩度小邦胤大怒て眼をいらけ存めて叱られ終り終り五

郎其坐中央に踞率尔の失礼庸者有ぬさるにりと時時

坐中に於て形の如く面を辱しと衆る条情たる仕合なりと時時

なく中ける故邦胤つり堪並立掛りけたふり短刀小手を掛る也

と引立て退去なり列坐士大将免小角に宥りて推津水小



召預けし置けり元より微差此者たるゆへ差異と辨へし及て  
て不覺の答ふ至れり余其咎と赦免あふべき旨連々名他けり  
五月中旬勘氣とゆふに社出勤して居たりける所宿所首尾無念ふた  
もひはらへ折あらし鬱憤と散まると二六時中隙と伺ひし程に七月四日  
の夜半なり竟小邦胤の寐間忍入り二刀刺て逃出たり千葉介起上りて  
憎ま小世悔めり所為哉と唯一色や社に次の間小居たりし宿直の者  
とも聞付て走り入て見侍社に邦胤朱股小成て鎌田めを脱さし打捕社  
と漸小云捨て事切れたる△本寺過去帳小邦胤鎌田孫五郎狂乱して赤額  
と切付天正十三年五月廿九才にて逝去○治乱記  
七月五日 家人小仰天して八方手分となり 捜し求社とも見えざりける 鎌  
田ハ夜中の事な社に城門を閉たり暗さし暗し洩出ん方なりし物  
陰小隠れ居て曉天小至り堀と乘逃奔て菊間の臺まで落行し追  
手小人救前途小充滿して中へ逃るべきやうなりし社に林の中へかけ

入て腹掻切て失ふける邦胤の息男千霍丸僅小六歳の義を社に譜第  
此家人小相議して先もて南方へ遷進し氏政父子伺ひけり千葉  
小田原 佐倉ハ敵地小とさるる要樞の所なりとて臼井社城主原式部少輔  
胤成と佐倉小移し入社て軍代小定め千霍丸と小田原に招て家臣とも  
此人質とぞせり社を後に新助重胤と号せし是をり老臣設樂左衛  
門尉相從て南方へ趣介輔して居たりける社に千鶴丸の姉十二歳ふて有  
し是も氏直社下知として其年の十月總州加島△加島ハ鹿島山のこと  
今社佐倉城の地なりと云  
処小新なる屋形と補移は社てける中村雅樂介佐の臣と成て善育の功  
とこそ勵みけるよき千葉家小於て四老とよき原圓城寺△印播郡城村小圓城寺  
ミ云寺あり是千葉家の  
其後ハ三家老とを社り中にも原式部少輔元是當家の一族して小金  
社高城源二郎胤則土氣社酒井伯耆守康治東金の酒井左衛門佐政



秩父 余流たゞて城持に旗下も手に属け大身なる士大将なるこの故小園東に  
て下能上小優れるたゞ小葉百騎原ハ子騎の大將とも千葉に原原に  
高城兩酒井とそ里信常談ありしとそ天正十八年小田原陣にとも千葉  
鶴九重亂の軍代として式部少輔胤成八十の人数と司て相州湯本口を  
ちりたる。北條家滅亡して千葉家も没落せしに 大神君清入國の  
後式部少輔胤成水佐平内 後平内 湯弱たりしと清旗本に召出は清近習  
の列小加へられし。天主教の宗門を信仰するは科りて慶長十九年  
は秋刑罪小處せられ断絶しけりとなき又千葉介重胤幼少小付て家  
臣小佐倉城と抱る事能く本多忠勝酒井家治小園渡しけり。累  
代の本領を離れて逐電し々々。大神君清入國の後總州筋の素  
内者小せらるへと賢慮を以て彼回臣海上 海保を 三吉押田庄吉并伊井の  
原式部少輔胤成の子水佐重光の酒井左衛門佐重光 前重光と云ふ子金

三郎おと御旗本に召出され汝曹の本主千葉家に正統の子孫ハなごさ  
と清尋ありに海上押田思案と巡らし先年邦亂に家入土方へ主用されあ  
り登りける時 大神君清使者上洛せし途申して出會口論して千  
葉家人以外の狼籍したり事ありし故又この爰を思召出され御遺恨  
と果さるる清存念小せり心得速く邦亂は年換死小付て令嗣は  
女子一人北條氏康の息女に腹小にありし達聽しけり。さしもの豪家  
断絶の事不便は爰なるを仰られ侍の女子に扶助料を下し賜り重胤ハ  
長く浪穿たたりける是併押田海上の邪心に賢慮を掲りて申させしに  
據るるる良小忠の不忠とありし氣數の命こそ墓なきに 或云東金左衛  
の流しある家系遠江を出るとありしと大州紙の流野を利の流と見えたり  
土氣系金の先祖とあり○家系に重胤ありし家系子ハ金三郎政成と云ふ  
○新編鎌倉志 五 千葉屋敷ハ天狗堂ノ東ノ畠ヲ云相傳千葉介常胤ハ  
舊宅ナリ東鑑ニ阿静房安念司馬ノ甘繩ノ家ニ向ト云ハ是ナリ司馬







滋盛 滋重 廣瀨 滋村

滋氏

宗

長瀨

大正初月 滋信

通信

滋氏

朝氏時朝 宗朝

日部文之市 日左集 齋也

日孫之集 川耐

時經

滋村

朝村

恭朝 孫了

日古 左集 入之

重信

信常

女事古谷 日古 左集 入之

貞宗

成光 竹乾

日八市 別來

國分五市 日古 常通

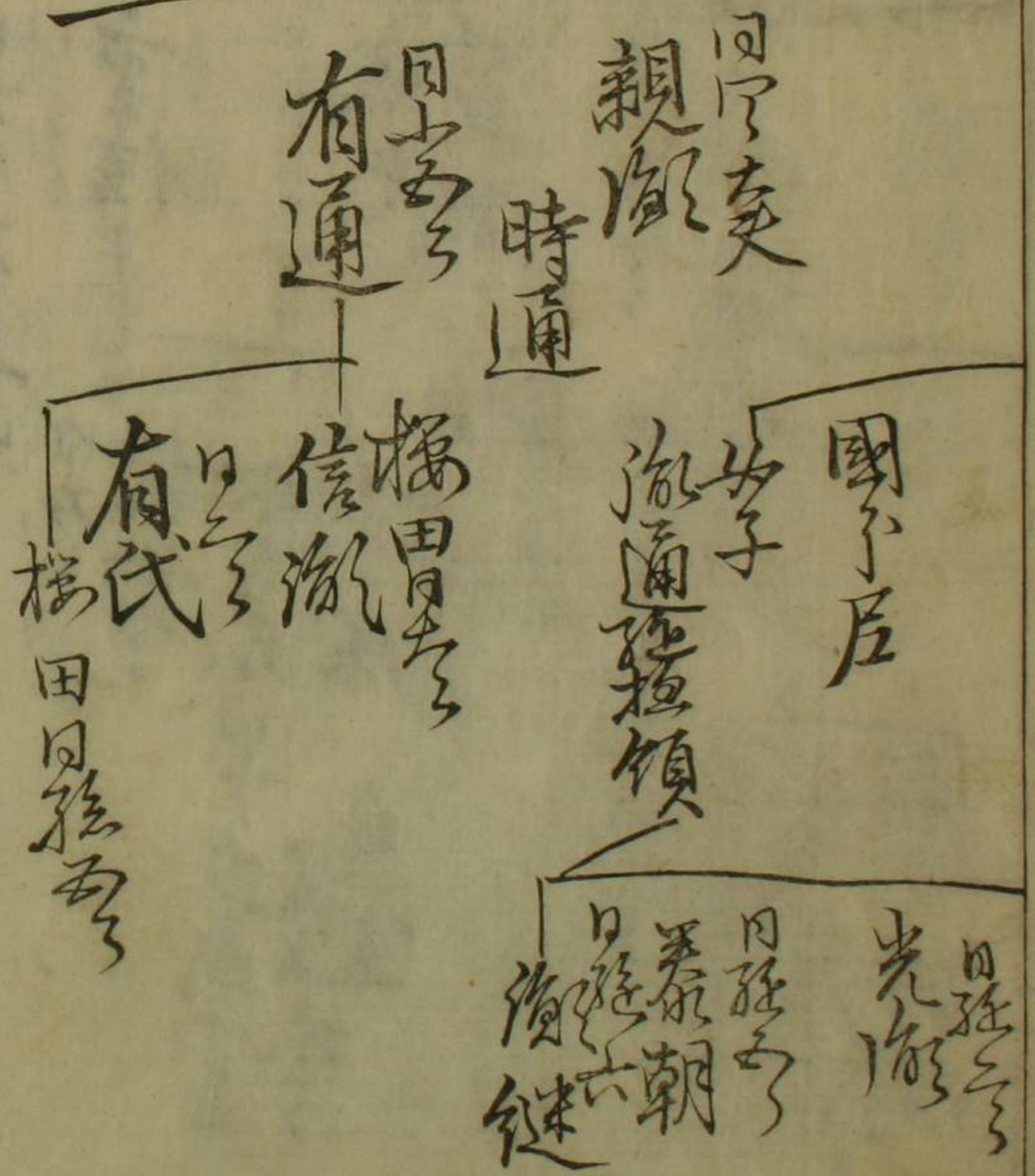
常朝

常朝

朝後



此系天正以前ノモノナルコト必セリ惜ラズ前後欠損シテ全カラス其全ヲ看シ人補テヨ



千葉氏系圖

相馬 武石 大須賀  
國分 東

△千尋集云屋形サマ御紋ノ月星ノ以前ニ松竹ニ  
雲ノ丸ニ松竹ヲ御家ノ紋ニナシ鶴ノ丸ヲ海上ヘ  
進上セシケルカ後ニハ雲龍ニテオハシクル云々

高棟王

△又安二年文書又永曆二年二月廿日平常胤文書ニ良文經明忠經經政經長經兼常重トアリ  
是千葉家相續ノ次第ナリ

高見王

高望王

良望 常陸大掾

將弘

良房 常陸大掾

將門

良將 鎮守府將軍

將賴

良兼 上總介

良定

將平

良文 長田祖  
村岡五郎  
一名重門

將為



良生 常陸六郎

良繇 從五位上總介 鎮守府將軍 忠光 常陸掾 常高

良詮 從五位下 上野介

良持 從五位下常陸少掾 孫在九州 良海 田滿院 入道

良廣 駿河十郎

將武 伊豆守

出現 兄同誅

良允

將國 信田小太郎 文國 小太郎

景遠 三郎 朝義

景光 貞元 子孫在九州

千世丸 父同誅元

女 如藏禪尼卒年八十余号常念地藏 世号地藏尼

忠通 村岡小五郎 大場梶原祖

為通 駿河守

忠賴 村岡次郎陸奥守從五位下 為將門智跡

將常 秩父武藏守

忠常 武藏押領使 下總介

賴尊 山伏号山邊惡禪師 土肥祖大力

賴望 小太郎 常望 相馬小次郎

兼賴 小次郎 或作長望 將長 長望

重國 小次郎 始号相馬 胤國 次郎 師國 相馬次郎

常將 千葉小次郎居總州千葉因氏烏 創建平山寺

恒親 安房押領使 恒仲

恒遠 賴任 村上貫有

胤宗 武藏七黨内野与黨祖 元宗 基永 野与六郎

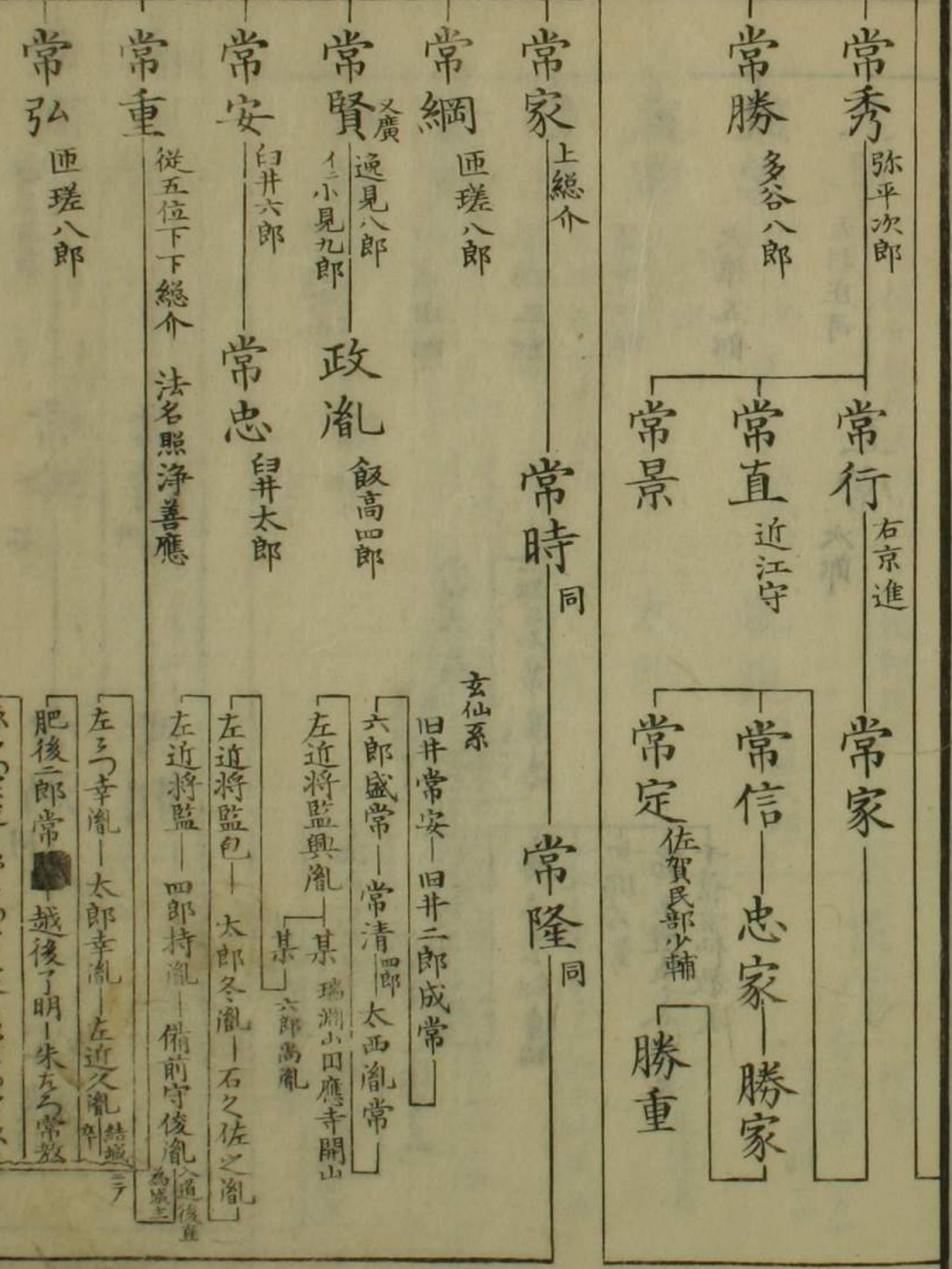
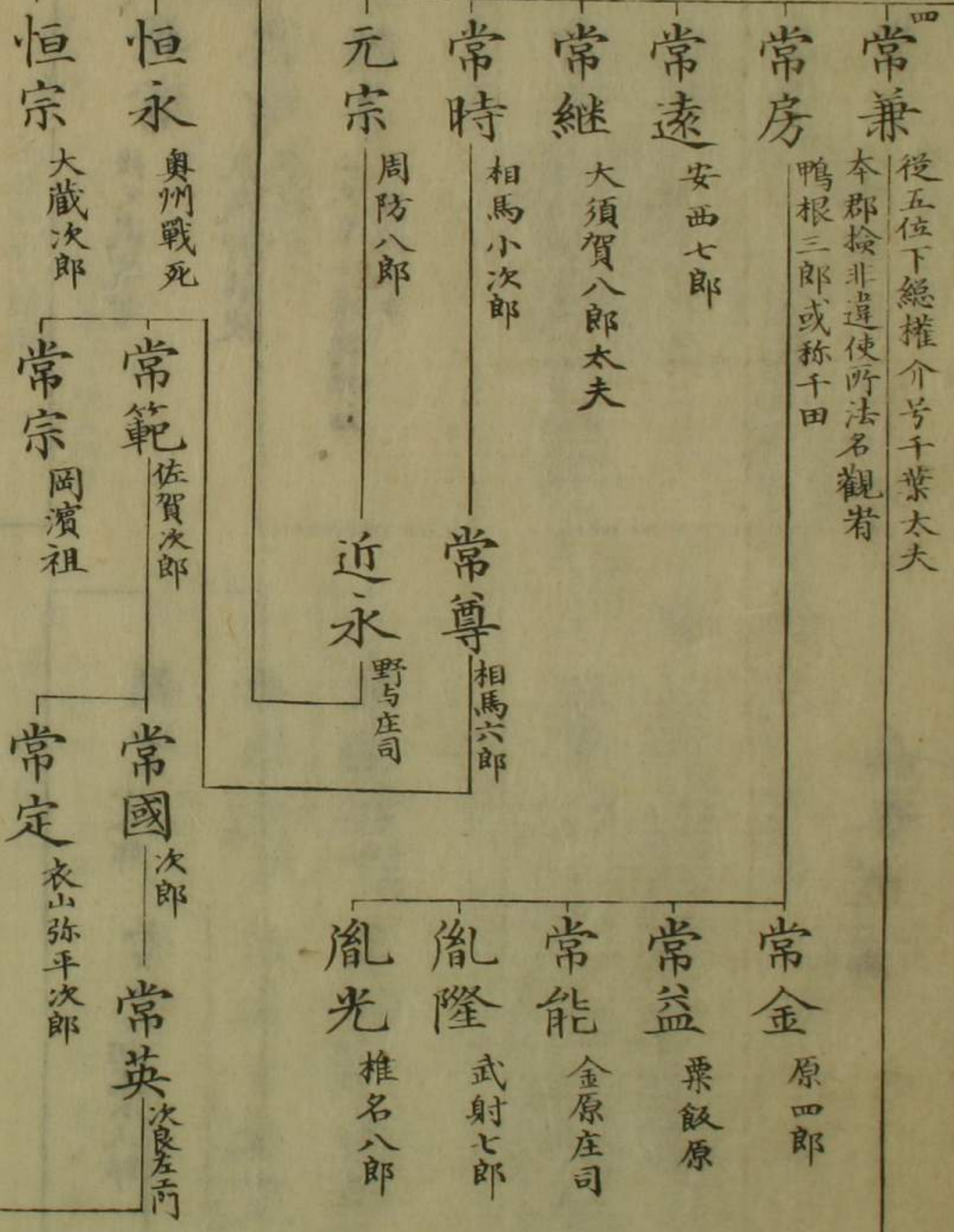
常永 四郎大夫武藏押領使源義家命名 法号覺永又永元

恒直 植生次郎

師常 相馬小次郎 實千葉常胤二子養子 十有繼相馬領奥州行方郡下總相馬 郡元久二年十一月卒六十七或聲二作ル



常兼 女佐竹左京大夫室  
 常房 女結城集人正室  
 賴常 原三郎  
 常益 岩部五郎 粟飯原家督  
 女伊藤大七室  
 常慶 匝瑳八郎  
 女遠山小太郎室  
 女里見新左門室  
 常通 父常長名代  
 常景 兄常兼時討死  
 常季 長南左門尉  
 常盛 平山季高養子  
 常時 元宗





常衡 海上与市

常幹 海上

常滿 同

常繼 同

常直 同

常清 同

常朝

常景

伊北新介

常仲

常茂

印東次郎

常範

木内三郎

盛常

潤野四郎

維常

大椎五郎

直胤

天羽庄司

直常

次郎

宇治合村三  
戰敗農人  
小河原若狹  
小河原家  
小河原三  
シキア  
一郎左布基  
基基

上  
源左常林  
源左三  
白井氏

源左三  
源左三  
源左三

少左友十郎喜始  
女友十妻  
女源八妻  
少左縫友  
常房  
千葉玄仙教美

廣常

上總權介梶原景時カ□三ヨリ頼朝殺之  
寿永二年十二月廿二日

良常

小權介  
寿永二年十二月廿  
二日鎌倉殺サレ

常清

相馬九郎

貞常

左馬介

胤親

角田太郎

親常

白井十郎

太郎

女

小笠原次郎長清妻

頼次

一名康常金田小太夫  
三浦大介義明解卡年頼常龍成

次郎

女

伯耆少将平時家妻

常胤

從五位下千葉介下總守護職母常陸大掾政幹女元永元年戊戌五月廿四日生  
建仁元年三月廿四日卒八十四法名淨春貞見 正六位上

胤隆

小見六郎

胤光

推名五郎

有光

太郎

胤正

千葉太郎新介法名常仙觀宿母扶父重弘女建久中奉頼朝余伐奥州大河兼任有  
功建仁二年七月七日卒六十一居鎌倉竹谷永治十二年壬戌生

師常

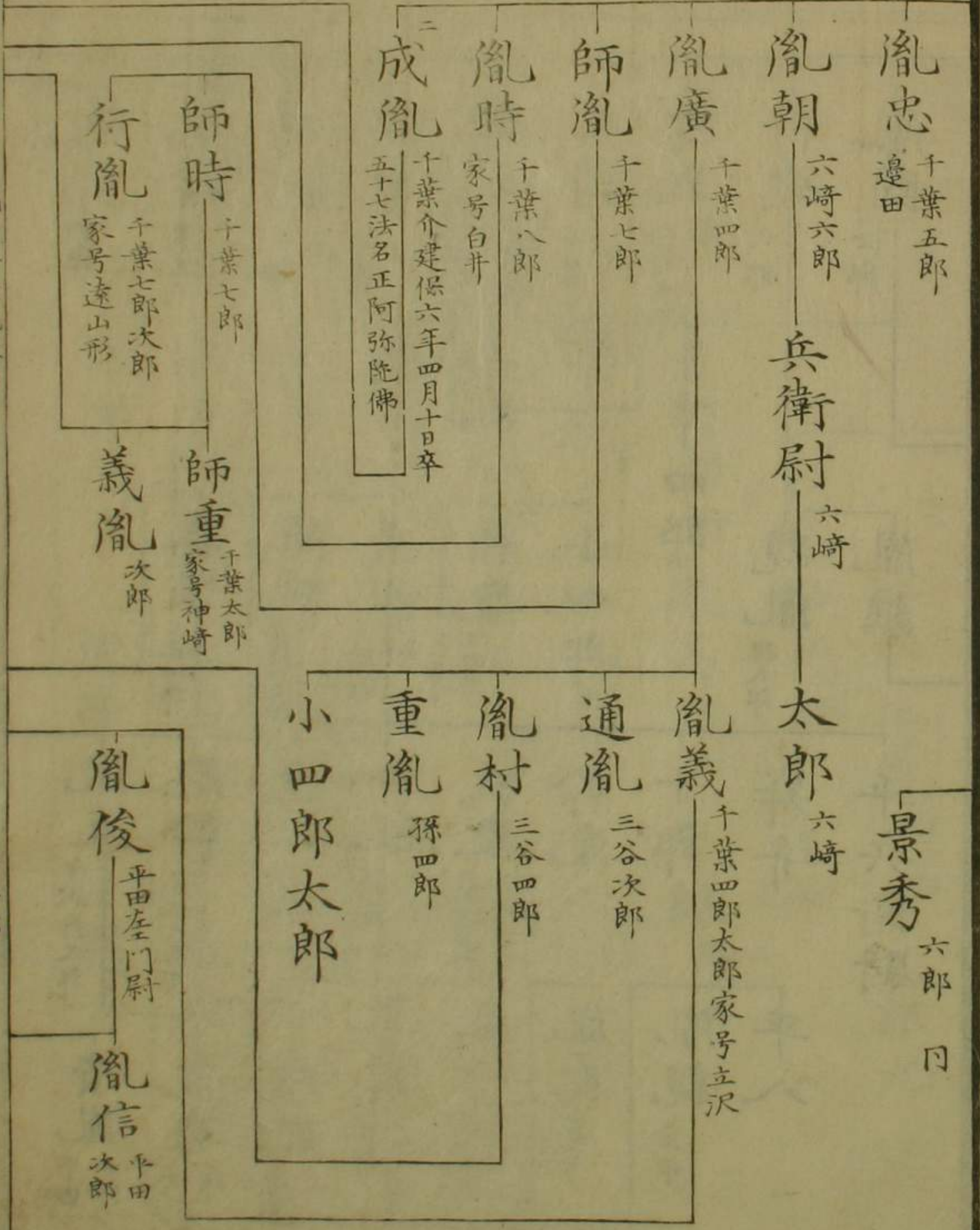
相馬小次郎為師國養子元久元年九月十五日六十七念佛行者無病而卒  
合手念佛如眠



宝治元年六月五日浦泰  
 村誅秀胤妻泰村女弟也  
 以故北條時賴命大須賀  
 左門尉胤氏東中發入道  
 泰道討之總官大御館  
 秀胤積炭薪於館外四  
 面及敵兵來襲縱火燒  
 之館威甚熾不可鎬近  
 秀胤令兵士發矢自其  
 四子入室讀經而後自殺

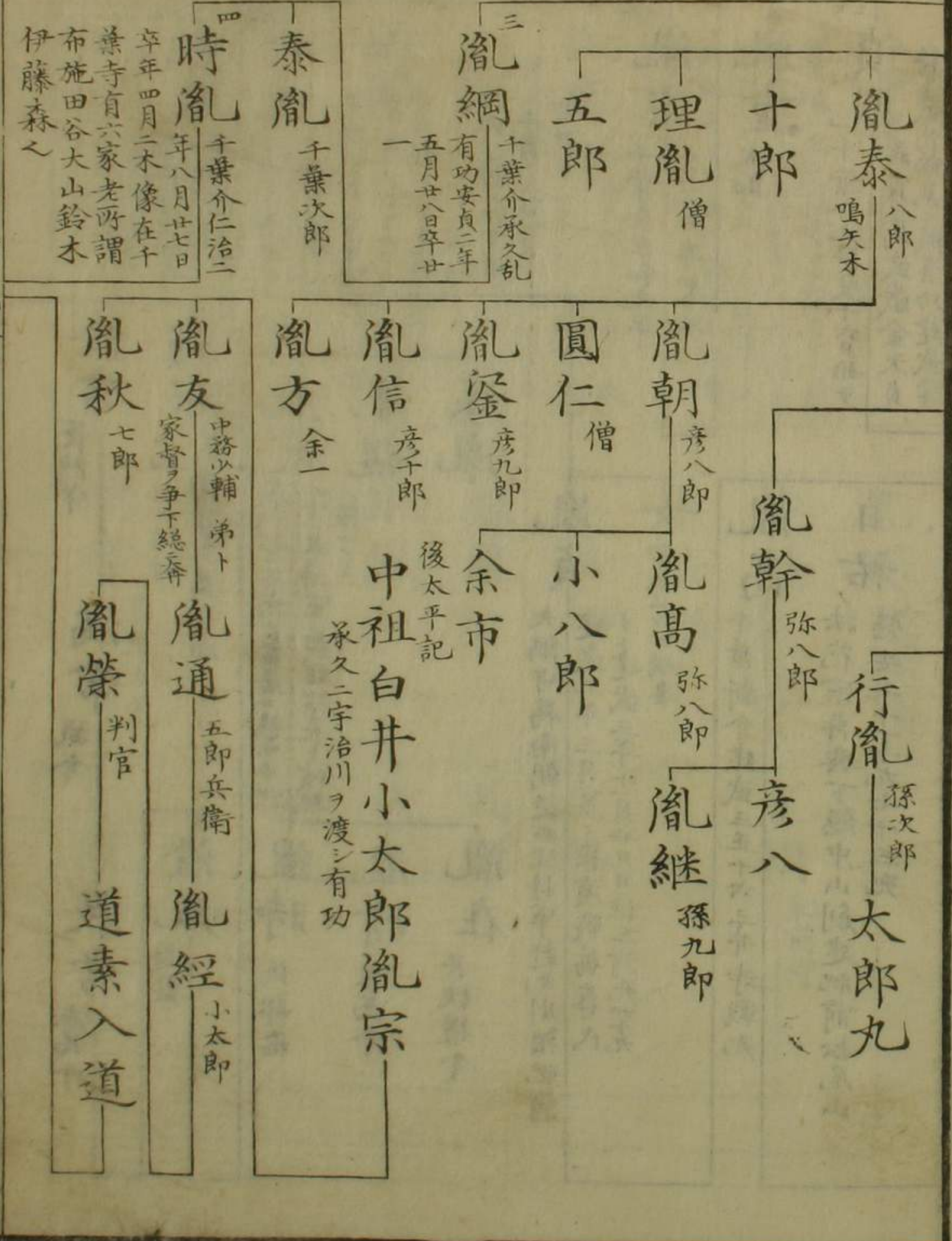
胤盛 武石三郎  
 胤信 大須賀四郎  
 胤通 國分五郎  
 胤賴 東六郎太夫  
 從五位下  
 日胤 居圓城寺号律静坊為賴朝侍祠治承四年從以仁王軍奮擊力戰于殺六人  
 遂戰死於光明山賴朝公治世之後為法事領寄附伊賀山田鄉三井寺早

北條九代曰嫡子式了大夫時二男修理亮政秀三男左門尉泰秀四男六郎景秀  
 常秀 上總介左門尉  
 源平盛衰記作  
 觀秀 栗原禪師  
 能光  
 秀胤 上總介  
 堀右京次郎  
 時常 植生次郎  
 一作植  
 曾襲領父食邑植生庄秀胤  
 奪之時常始而絕及聞秀胤  
 遭難忽入大御館与兄同自殺  
 秀時 式了大輔同父自殺  
 秀泰 植生修理介同父自殺  
 一作垣  
 秀綱 五郎左門尉 曰



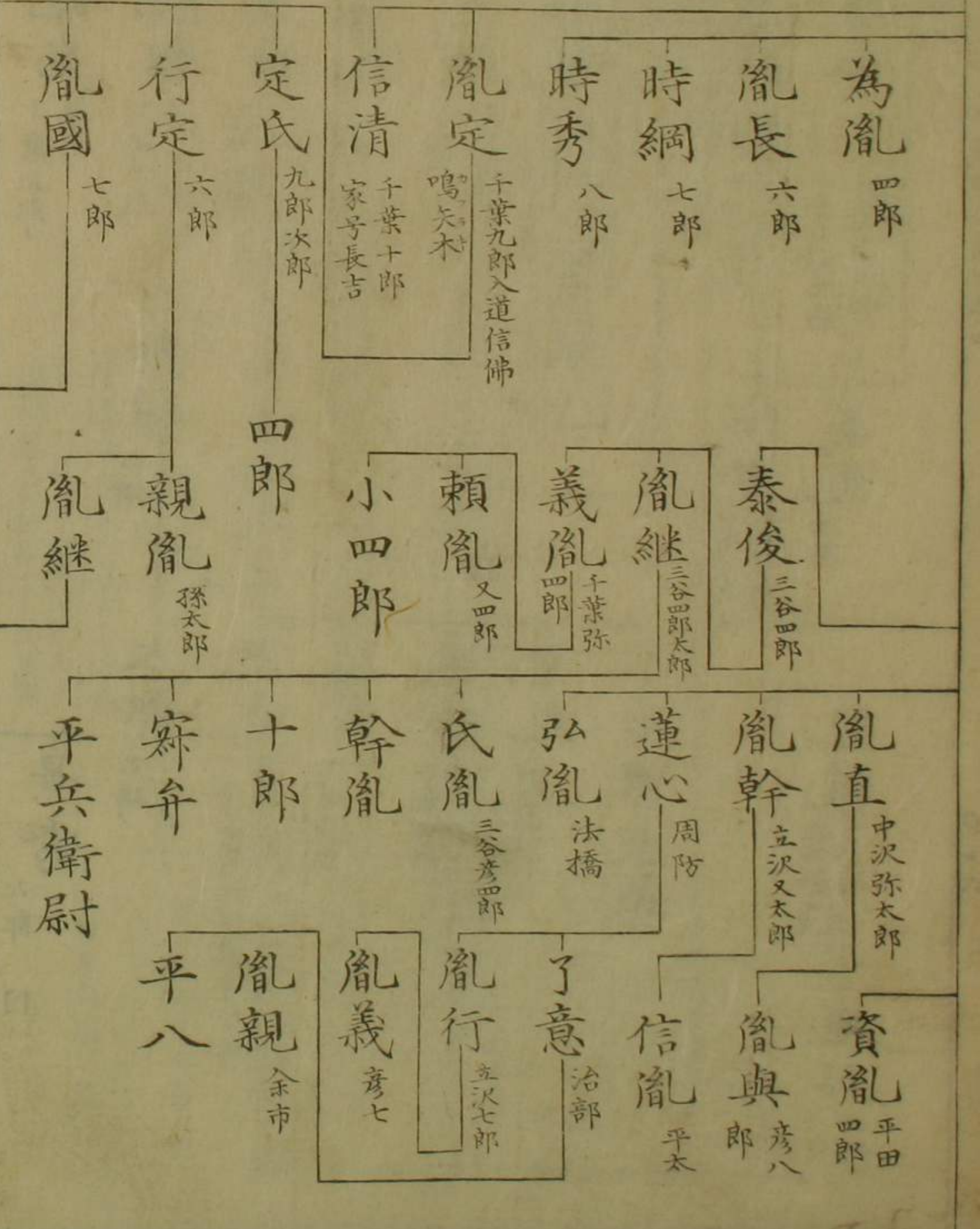


春胤 將國  
文國 頼望  
常望 將長



○成田泰詰記卷四

○十七





一本胤宗作時胤  
云時胤卒時頼胤  
三歲故胤宗介十九

十五 頼胤 千葉介文永十一年八月廿六日卒年三十七法名長春常喜

十六 宗胤 千葉太即新介大隅守建武二年戰死於三井寺建武三年正月十六日三井寺戰千余三將トノ二木ヲ破細川郷定禪カ六十圍レ手勢ノ三百五十打ル

十六 胤宗 千葉介正和元年三月廿日卒四十五

胤重 五郎

三十七 貞胤 千葉介元弘三五十六始テ義貞ニ屬武藏金沢貞將一武州鶴見ニ戰有功建武三

八日伐尊氏建武四年正月十二日北國下降義貞ノ後陣トナル五百キニテ打ケルカ雪ニ道ヲ迷ヒ御方ニナレ敵陣ニ迷ヒ出尾張守高經トシキニ使ヲツカハスニ高經ニ屬スト參考太平記十七卷八十九ニ出觀應二正朔卒年六十一法名喜阿弥陀佛号淨徳寺

三八 氏胤 千葉介天龍寺供養為隨兵善和歌新千載集ニス貞治二九十三日病卒於美濃年三十一イニ康永四八廿九日子時号新介

酉譽上人 幼名徳千代了譽上人弟子武州傳通院開山

九四 満胤 千葉介応永廿六日卒年六十四法名道山弥阿弥陀佛号常安寺 千葉次郎 氏満

詮常 長門守 満常 城介 教常 左馬介 澄胤 將監

胤定 長門守若州ニ舊居ス後太平記四十一卷將軍義昭信長ト確執ノ段ニアリ 胤親 胤基 胤貞 大隅守属南朝征西征將軍赴九州領肥前建武三年三月多良濱戰属尊氏一建武三年十月廿九日住三河死四十九女宇都宮公綱妻 胤高 千葉新介建武三正十六三井寺戰死 日祐 法花宗再興下總中山創建肥前松尾山應安七十九七十三死

胤鎮 千田弥二郎 胤継 胤朝 肥前守 干法師 胤盛 乙法師 次郎 經胤 九郎 胤盛 元胤 教胤 胤資 胤勝 胤繁 興常 實胤盛子



常光 原次郎

常重 原次大夫

清常 五大夫

胤重 三大夫

重綱 三大夫

政常 三大夫

常尊 三大夫

貞常 系彩大夫

兼胤 千葉介修理大夫永享二年六十七

日於鎌倉卒年三十九法名喜山  
眼阿弥陀佛有四家老原田城寺  
牛尾高城也

康胤 馬加陸奥守法名相常應

享德中源成氏与兩上杉戰  
屬成氏有功任千葉介康正二十一朔  
戰死上總八幡村年五十九首八  
送京梟東寺四塚

善胤 胤治

胤賴 實太宰少貳資光三男

胤誠 勝利 大和守

長良 刑了太輔 家良 大炊介

常氏 對馬守

胤氏 多古

胤清 千葉右京大夫延文四七月筑後新  
少貳忠資三屬

義胤

胤滿 法名日園 胤春 千田 應永十七日卒

滿胤 常安寺丞

兼胤

胤直 介道号 禾野寺

自秀 七郎千葉 介法名元三

實胤 守胤

胤直 千葉介康正元八十五日為古河  
成氏自殺於下總多湖年四十二

法名常瑞臨阿弥陀佛号相応母管  
領上杉右佐氏憲禪秀女

賢胤 中務丞同先死母同  
法名了心

胤幸 千田彈正 胤仲 千田力勞丞

胤範 千田 法名送範 胤親 千田喜兵衛

胤嗣 千田 法名日嗣

高胤 小太郎 千葉介 胤房

胤連 千葉常陸介 九州住 胤平

胤親 介

宗景上座

光胤 原豊前 寛正七二七卒



實胤 千葉介後道世卒於美濃  
上杉政實ノ婿

自胤 千葉介 文明十年攻下総  
白井城取之遂領下総海上  
武蔵菅西石濱赤塚

盛胤 武州千葉中務  
母上杉彈正

良胤 同次郎  
号松月院

惟胤

胤持 康正二年六月二十日卒年二十三  
法名大覺興阿弥陀佛

輔胤 竹慶岩橋殿 按兼胤弟養子イニ介  
延徳四十五日卒年七十三法名常阿弥陀佛イニ明応元二五日七十七

孝胤 千葉介 文安元生 永正二八十九日卒年六十二イニ三法名常輝眼阿弥陀佛  
康正二父戦死ノ片十三ニ按兼輔胤ノ子カ孝胤ノ生輔胤ノ二十八ニ當ル

胤房 越後守

胤真 式ア大夫  
胤榮 大蔵丞  
豊前守

胤将 早世新介

宣胤 五郎享徳四八十三日総州多胡阿弥  
陀堂ニテ自殺

勝胤 千葉介享徳五廿一日卒六十三法名常歳其阿弥陀佛有三家老原鳴矢木木内ノ

幹胤 文明四生 永正年四十二當ル  
常陸人鹿島左ノ尉養子 兵法名人

勝清 常陸人推崎五郎養子

久胤 勝胤同母生半身偏枯  
家臣公津左近大夫養子 信胤 公津平内左ノ

昌胤 千葉介天文十五正七年五十一  
法名常天法阿弥陀佛 利胤 千葉介弘治三八月七日卒年三十一法名  
常賀覺阿弥陀佛

胤定 千葉鳴戸八郎  
兵ア少輔 利胤 大永五生 親胤 元龜三生

胤富 享禄四生 良胤 千葉介多病ニ  
實利胤第三弟 ヨリ第三ツル 當胤 知胤

邦胤 重胤



親胤

千葉介天正七五四為北條氏政害一年十七法名常圓一依原逆心生害利胤第四弟

胤富

千葉介天正十三五七年五十五一三一利胤第三弟七年五月四日法号重一富一

邦胤

千葉介天正十六五月乘醉斬家士歟田万五即還一創一病創死

重胤

千葉介介母上野岩松氏寛永十年六十六日卒江戸五十二

女 母小田原北條氏

相馬

師常

相馬小次郎

義胤

五郎

常家

矢木六郎

行常

戸張八郎

春胤

民一夫入一

頼泰

次一左一尉

胤盛

三一左一尉

胤經

五郎 左兵衛尉  
法名茂林

胤綱

小次郎  
一一二一繼

胤家

矢木式一大夫

胤繼

四

忠胤

九一左一尉 上野介子一人

時綱

七郎

胤景

六一左一尉

胤宗

胤村

相馬孫五郎一左一尉 永仁二年卒  
任將軍頼嗣宗尊



胤氏 次郎左門尉下總相馬  
又作氏胤

胤顯 三郎

胤重 四郎

有胤 五郎

師胤 左門尉  
松若丸三郎奥州相馬祖

胤朝 八郎

胤實 十郎

胤通 余市

胤門 五郎

胤氏 胤忠 下總相馬祖  
胤胤 重胤 奥州相馬祖

胤基 次郎

胤重 四郎左門尉  
射手

胤忠 次郎左門尉  
下總相馬祖

胤長 小次郎左門尉

忠重 四郎左門尉  
精射建武二年  
山門之役属官軍与本間孫四郎源資  
氏同射賊兵大頭名

胤宗 小次郎左門尉  
資胤 上野介  
月桂

胤儀 左門尉法名在桂

胤高 左近大夫法名幸山  
上野介

胤實 彈正忠左門尉法名正安

胤興 三郎三田彈正常陸介  
家紋巴

胤德 小次郎下總守  
号宝珠菴 三子アリ

胤勝 三田彈正武州三田庄将門官建立

興秀 師岡次郎

胤定 三田彈正  
政定

胤廣 修理亮因幡守法名天桂

行胤 弥次郎  
朝胤 次郎兵衛  
女 号鶴夜又治胤母也

重胤 弥五郎孫五郎胤門養子建武  
二年國司合戰属斯波三郎於  
葦堂忠死法名欽叟

親胤 出羽守

光胤 弥次郎  
建武三五月奥州打死

胤頼 治部少輔松鶴丸  
讚岐守



憲胤

千代王治了少輔法名洞岩

胤弘

孫次郎讚岐守法名道空

重弘

長門守

高胤

出羽守法名大雄

盛胤

大膳大夫

顯胤

嶺岐守

天文十八三死雄公莫宗

盛胤

彈正

義胤

長門守

利胤

大膳大夫

胤貞

小次郎法名花桂世、越州相馬住

胤清

小次郎左近大夫  
玉紫

整胤

小次郎天正十七六月十八日為家臣生害  
法名玉宗實山

治胤

左近大夫法名了山  
天正ノ頃

秀胤

小次郎法名春山仕家康公  
天正十八年召出サレ五千石

胤信

信濃守法名中岩

盛胤

小次郎法名天崇奇

政胤

小次郎  
大坂御供

貞胤

同

某

小平二

義胤

大膳亮

慶安四三五日卒三十二

勝胤

長門守安土屋民了少輔  
忠直次子後改忠胤

貞胤

出羽守



武石

胤盛 武石三郎

胤重 次郎入道

廣胤

三郎左門 文忠比

胤村 二郎左門

朝胤

四郎左門

長胤

小二郎七郎入道 相摸守時頼遊去弘長比千葉介頼胤同時

胤氏

宗胤

肥前守佐木遠江守氏信女嫁

五郎

胤繼

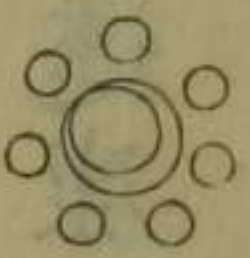
孫四郎 左門尉 奥州船迴人戰討死

胤道

武石五郎 但馬守

大須賀

旗紋



幕紋 鹿



胤信

大須賀四郎建曆年和田義盛乱有功賜甲州井上庄

通信

二郎左門尉 早世

胤季

多部田次郎左門尉 一秀

胤村

荒見小四郎

重信

奈古谷七郎左門尉

範胤

宝治乱三浦黨於法花堂自害 成毛八郎改君島十郎左門嗣胤 移下野

宝治乱泰村打後奔下野依宇都宮頼綱居本州君島郷改氏弘長元年辛酉八月七日卒五十八法号道昌

朝胤

一胤朝 同太郎

信常

一胤 太郎

貞康

二郎左門尉

貞宗

左門太郎

時綱

四郎左門尉 法名宝蓮

胤光



一本成胤元則泰了

成胤 左門尉三浦行泰女

貞範 祖母并左京介

胤時 十郎 正六位備中守六郎

建武三月參河矢作戰改義貞賜感狀曆心元八月十六日五十六卒号長基

富高 岡本信濃守 六月十七日越後芳賀禪賀三属

綱胤 備中守母守都宮時綱女

觀志二年薩陸山戰属尊氏有賜感狀三月与桃井直常長尾左門尉戰死上野那和郡死三十三号道慶

胤重 風見新右門尉

胤景 大宮兵了少輔

胤光 延生二郎左門尉

女 茶師寺三川守紀綱之妻

泰胤 四郎 從五位下備中守 母守都宮氏家盛綱女

延文三月廿日二十八才卒道謹

知胤 四郎備中守女益子出雲守紀真正女 明德三月三十日四十一号道慶

常光 胤泰 胤元

胤兼 五郎左門尉 法名宝胤 宗兼 又五郎

師胤 弥五郎 胤親 左門尉

胤春 彦四郎

又五郎

光胤 三位房

胤時 掃部左門尉四郎

胤連 四郎左門尉 行胤 左門尉 胤義 四郎

遠康 氏胤 四郎

頼孝 孫四郎 一秀 胤頼 四郎二郎

貞泰 五郎 行泰 四郎

胤繼 左門二郎 朝胤 孫三郎

胤頼 六郎 良胤 郷房

春胤 四郎 胤盛 又次郎

氏頼 金房丸 弥二郎

胤繼

胤房



胤元

四郎備中守母備中守綱經妹  
忘永廿六月十三日三十一号道清

秀胤

平次郎備中守母宇都宮基綱妹  
忘永三十四九月三日卒五十一号道喜

貞久

祖母井信濃守

光胤

三郎備中守母梶原彈正女  
長祿元五月十日四十九号道哲

女

長山修理亮忠好妻

茂胤

八郎備中守母塩谷左門大夫義孝女  
文明十四三月十六日三十五号道高

定胤

七郎備中守母今泉但馬高光女  
永正四六月廿四日四十二道白

胤家

六郎備中守母壬生上總介義雄女  
大永七七月八日三十二道高

女

神山下總守綱藤妻

廣胤

太郎左門尉母壬生美濃守高宗女  
天文十八九月廿七日那須戰死於  
五月女坂年三十三道榮

慶繁

僧宇都宮光明寺及桂連寺開山

女

戶祭下總守妻

高胤

五郎備中守母芳賀刑部大補清高女  
慶長二六月十五日五十八号道山

高範

左馬亮

胤次

太郎左門尉

女

益子左京亮妻

胤氏

次郎左門尉法名信連寬文五丁未六日  
上總介打手大將上總一宮大御館ヲ攻秀胤  
ヲ打取

師氏

次郎

時通

信康

五郎左門

宗常

四郎左門

為信

六郎左門

為胤

二郎左門

景氏

賴氏

朝泰

左門尉

顯朝

朝氏

新左門尉法名信圓

胤泰

朝泰

時朝

二郎左門尉法名禪信

宗朝

下野前司  
法名信宗

宗時

下總守

宗信

越後守  
法名生應

憲宗

左馬助

高晴

三郎

慶長中於上三河戰死

晴胤

父次郎

寬永元十月十三日三十八  
道聚

照胤

熊之介  
母櫻井氏



興胤 大須賀十郎  
母高橋氏  
胤方 君島六郎

國分

胤通 國分五郎

有通 小五郎 号村田

常義 同六郎 大戸矢作領主

胤實 太郎 胤長 又太郎

常氏 六郎

胤義 平太 号大戸川 定胤 平太六郎

行常 六郎五郎 行泰 五郎七郎

七郎五郎 龜王丸

常通 同次郎

常朝 小次郎 法名悟連

重常 小次郎

朝胤 孫二郎 号松沢

朝俊 孫四郎

光胤 孫五郎 胤秀 又五郎

胤盛 孫三郎

泰朝 孫五郎

胤門 六郎 胤貞



竹王丸 彦五郎

長胤 又六法名了性

胤村 彦次郎就外戚所領

泰胤 号春社彦六郎号矢作惣領

通泰 八郎

胤氏 孫六

治時 十郎

氏胤 余一

胤任 小六郎

弥五郎 鶴金丸

朝綱 弥五郎 松沢惣領

余五

胤重 余五 法名蓮性

道光 僧

理法

事法

胤連 彦五郎 法名宗常

明鑒 鄉阿闍梨 又号公一

頼覺 大進房 本名淨一

幹胤 太郎 御房丸

信胤 五郎太郎

師泰 孫五郎

朝通 彦五郎 法名信聖

胤幹 六郎

頼泰 七郎

胤頼 孫七郎

頼通 十郎

盛村 小五郎

小六郎

又五郎

宗通 彦六郎

胤朝 孫五郎



胤頼 孫六  
乙若丸  
千代若丸

東

胤頼

東六郎大夫 一 後五位下

重胤

太郎兵衛尉法名覺然 一 平太武者所兵衛尉入道  
太納言為家 右大臣實朝 歌道傳授

元久元正 正月廿二日白田山重忠討伐 片大將北條義時先陣 昔兵衛尉後陣 堺平二入常秀  
大須賀四郎胤信 國分五郎胤通 相馬五郎義胤 与重胤武藏國二保川三戰有功  
壬四月廿七日 父弱冠ヨリ祇候ノ例ヲ以致望勤任建保三甲戌七月廿七日大倉石大慈寺供養隨  
兵六年戊午五月廿七日 右大將鶴岡拜賀隨 兵七年己卯正月廿七日將軍右大臣拜賀隨兵

胤朝

木内下總守承久二年六月十四戰有功 但馬磯部在淡路由良左總領号次郎

胤康

風早四郎入道  
承久二六十四字治有功

康常

太郎左五門  
康元丁巳十月八日大慈寺供養隨兵

胤光

小見六郎

為康

次郎

頼康

孫四郎

真舜

金蓮房

貞泰

彦四郎



榮尊 胎蓮房

時秀 泰宗

胤家

本内次郎儀部庄傳 寬元二甲辰八月十五日鶴岡供奉

景胤 孫次郎

胤時

同四郎号小見由良庄傳 東鑑寬元四年三見工

按下總四郎可考

胤直

同四郎 法名道源

胤長

同五郎

胤氏

六郎号虫幡

胤盛

本名時信号油田七郎法号道胤

胤俊

八郎

成胤

八郎太郎

胤光

九郎号田部

泰胤

弥九郎 法名一祥

公胤

八郎二郎

九郎次郎

胤定

十郎

胤行

同余一

幹胤

孫次郎

胤持

彦五郎

胤祐

余次郎

胤信

胤惟

彦次郎

胤忠

又次郎

胤義

七郎次郎

胤元

小六郎

胤繼

弥七郎未分配田立惣領

胤信

彦七郎

胤持

弥七

胤定

式部房

胤教

孫八郎

胤清

小六郎法名良清

胤祐

六郎

胤貞

又六

胤盛

六郎四郎

胤圓

火貳房

胤潤

大夫阿闍梨

胤靜

郷房

胤光

胤顯

孫八



胤次 六郎太郎

胤義 又次郎

胤成 弥九郎

妙然 六郎入道左門尉 黒衣 胤盛 彦四郎

胤景 七郎

宗源 覺性房

胤家 弥六

胤勝 八郎

政胤 孫四郎

胤氏 又四郎

胤行 一後五位下為家歌道相傳東鑑建長四申務少輔胤重考 中務丞法名素暹 一六郎中務入道 承久三年巳六十四守治戰美濃國郡賞三

胤方 海上次郎法名道胤建長四十二月十七日 父子隨兵胤方為後陣

胤久 四郎

胤有 海上五郎 森戸領主

安貞 戊子七月廿三日駿河前司義村田 村庄渡御隨兵寬元二甲辰八月十五日 頼嗣鶴岡放生會御覽供奉仁治四年 癸卯七月十七日御所詰番聚

兼胤 五郎九郎

有胤 四郎次郎

胤久 六郎

圓祐 大輔禪師

樂胤 弁禪師

胤貞 小六郎 改胤勝

胤氏 中務丞

貞胤 六郎右門尉 改清胤

胤宗 三位房

政胤 八郎

胤繼 六郎

宣胤 小次郎

胤國 彦次郎

泰行 因書介法名行暹建長五十七日雖撰隨 兵先 婦國不如例

義行 四郎建長三年辛亥二所進發隨兵

素源 六郎左門入道

顯信

盛義 六郎

胤義 孫六

重義 七郎



胤見 孫六 治胤 六郎

胤豐 兵庫介

盛胤 本庄正東七郎法名妙覺

長胤 海上四郎

行胤 中務丞 号船木 法名理一

胤世 七郎太郎法名良圓

朝胤 号边田 六郎法名慶胤

資胤 高上弥七 法名理慶

胤基 松本九郎 法名善覺 建曆三月三日和田義盛乱打死

九郎

胤景

阿玉郷主海上弥次郎左三門尉備中守 建長四十二年七月十七日將軍鶴岡供奉先陣隨兵弘長三月八日來十月二日必定上洛供奉隨兵註文

胤行

胤朝

木内下總次郎

胤方

海上亦次郎 海上祖

胤康

風早四郎

胤景

弥次郎備中守

胤泰

女 佐竹遠江守貞義妻 刑了大輔義篤女

胤長

成胤

胤文

馬場十郎法名見一

胤門

弥十郎法名伴阿

胤郷

又次郎

秀胤

胤清

親胤

有胤

七郎左三門尉法名成高

胤俊

叔父理慶跡續

胤茂

法名定意 建武二宗胤屬為官軍有功

直胤

中務丞法名秀海

教胤

横根郷主太郎左三門

胤泰

海上惣領六郎左三門

師胤

筑後守法名理性

女

佐竹義篤女

公胤

八郎法名理慶

憲胤

筑後守志永禪秀乱 属持氏有功

信濃守

胤貞

長谷左三門五郎

胤忠

胤顯

常陸介



八  
胤名 六郎中務少輔

胤國 東孫太郎先父早世

高胤 孫次郎下總守実阿

朝胤 高上弥七

資胤 理慶

胤基 松本

胤文 馬場承久元巳卯  
右京權大夫義時大  
倉寺入御供奉隨兵

行長 助二郎丹後守先父死  
八月六日在兵尉弘長三素暹追善懷命之經ヲ書ス將軍夢想ニヨツテ也

胤長 イ仲隨兵三根ルレ先帰國依テ不例

胤廣 常陸六郎  
幹胤 弥七

胤勝 權太郎  
為胤 小四郎  
胤名 四郎左内尉  
信阿 等阿

秀胤 三弟 弥八郎掃部介宗永  
粟野郷領主

有胤 弥七郎左内尉成高  
叔父資胤養子

胤俊 左馬介  
祖父実阿跡

胤家 幸禰丸  
甥廣胤跡

有胤 七郎左内法名成高  
実高胤子

胤重 中務少輔  
下野守素通  
後行氏

胤是 中務

胤耀 六郎

胤秀 次郎左内尉 実覚  
胤元 左京亮 実全

胤氏 出羽守

胤光 六郎 本満胤

胤壽丸 六郎

行氏 從五位下下野守  
古今相傳 素道

女 歌人  
續拾遺作者

胤行 一本  
泰行 四書介

義行 四郎

氏村 六郎左内門入道素源

女 歌人前刑ア少輔忠成朝臣室忠成三浦  
泰村一毛利入道西阿為同意然レ凡  
胤行一官ノ功ヲ賞シ當歳ノ小兒ト凡ニ  
胤行ニ預ケラル

胤行 一本

常顯 從五位下中務大輔下野守  
法名素英天龍寺供養供奉人  
元弘三年四月六波羅籠城衆ニ東三郎左  
内門尉氏時アリ可考淡河左京亮通時  
ニ屬ニ東寺西七條ニ陣シ赤松四心ヲ打

氏村 平大 素源  
新續拾遺作者

時常 素阿三  
新續撰作者

氏村 平大 素源  
新續拾遺作者



師氏 從五位下下總守明德三相國寺供養隨兵  
五人内弟二番永永廿九年卒

胤綱 改益之從五位下式部少輔下總守  
素明

氏數 從五位下下野守宗玄

元胤 三郎早世  
妙童院 常慶 下野守

常菴 和尚木蛇寺

氏胤 中務官内少輔  
素珊

常縁 從五位下下野守素曉又素傳

時常 氏村 常頭 師氏

總州東庄三十三鄉并美濃郡上郡在城  
自承久二至文明忘仁乱ノ并關東下向間  
為齋藤妙椿攻落ヲ常縁詠和歌妙椿  
ニ送ル敵感之以城ヲ帰ス古今集令傳  
授公家無双歌人

氏數 常縁 常慶  
常縁 前車後車語集三葉  
常兼十三代 尚慶 下總守

頼數 官内少輔  
素光

頼數 元胤 常慶

常和 左近大夫

胤氏 素純歌人入集  
山里ハ心ヲシモ  
ナクサミヒトツ  
木向ノ秋ノ  
夜月

女 盛數妻  
胤縁 遠藤新兵衛  
實盛數弟

頼房

盛數 實遠藤新兵衛胤好子  
婿養子初東後遠藤

尚胤 法名素經

常氏 官内少輔法名素山壽昌院  
自為家郷古今相傳至永祿  
年中十六代正統也

胤基 遠藤大隅守  
秀吉三任文祿  
四年朝鮮ニ病死

胤直 慶隆



千葉氏故城  
址の圖

登戸村

治承四年の某月某の比武藏國  
勝呂の郷とて所の住吉社に  
神拜しとてとててを侍り

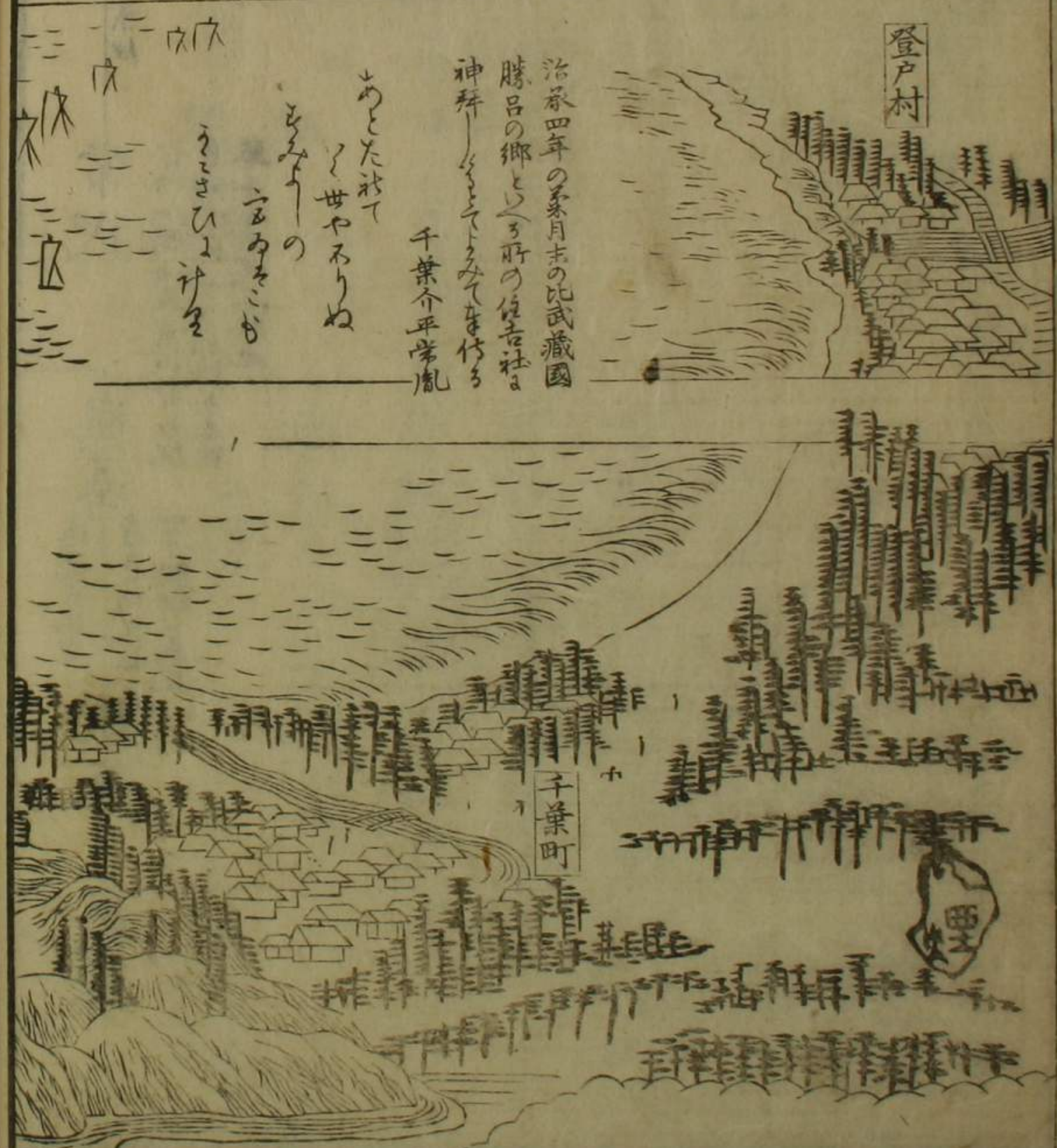
千葉介平常胤

あつた社で  
くせやろりぬ

とみりの

まのまの

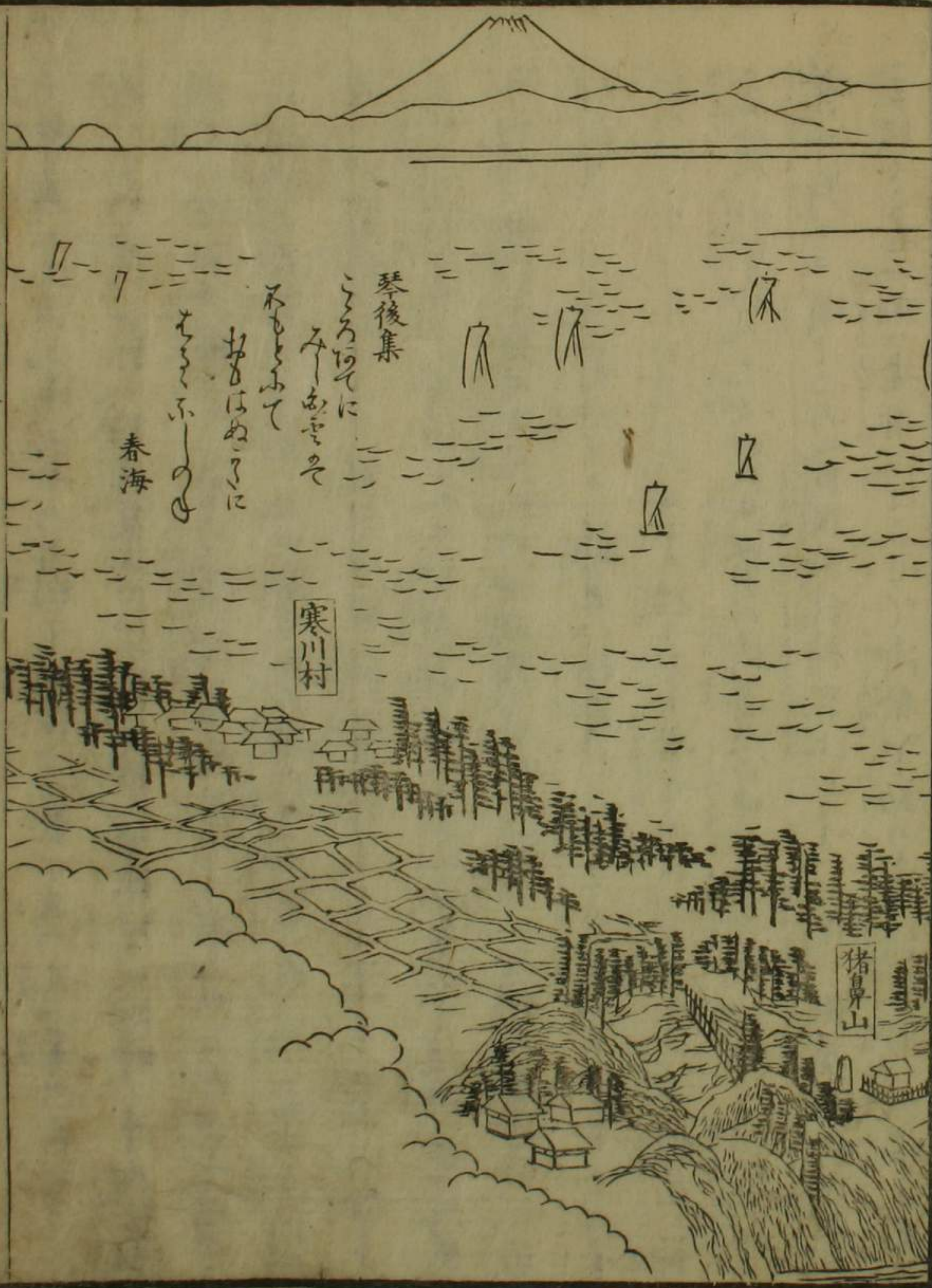
うさひしけ



千葉町

猪鼻山

○成田恭詣記卷四



琴後集

ころろに

みあまそ

ふもふて

おはぬに

そふの

春海

寒川村

○三十五



○千學集小大治元年丙午六月朔よりめて千葉と左つ凡一萬六千軒あり  
表八十軒裏八十軒小路表裏五百八十餘小路之曾場鷹大明神より御達報  
稻荷の宮に御前まで七里の間御宿之曾場鷹より廣小路谷部田まで國中  
に諸侍の屋敷を置是に池田鐮木殿の堀内より御宿に御宿の東園城  
寺一門家風たがより宿に西原一門家風たがります橋より向御達報まで  
八宿人屋敷あり是より河向と市場とをり千葉の守護神に曾場鷹  
大明神堀内午頭天王結城の神明清道報の稲荷大明神千葉寺の龍藏  
権現是なるを弓箭神と申妙見八幡摩利支天大井是なる千葉御神事  
ハ大治二年丁未七月十六日より始なり常重御代御事之御事假屋ハ神  
主八人社家八人乙女四人御祭に御舟ハ宿中の老番に役なり供物ハ千  
葉中野十三貫と云る同関錢諸侍衆上げ申一関ハ假屋の供物と神  
主にとらせ一関ハ老番にとらせ御祭と勤り結城舟ハ天福元年

癸巳七月廿日より始る時流の御代御事之御後下御送の御舟なり  
結城の村督小安倉出雲守と申その永鏡と云ふ取立しその結城今  
能寒川なり大治二年御神事始り天正二年甲戌まで凡三百四十年之  
○東路能はせに十四日十五日千葉の崇神妙見の祭禮とて三百疋の早馬代  
見物と云ふと云ふ  
△千葉集ハ信一と云ふはしり社と考時  
千葉家の左様と観るに是を御代ありつたり  
龜澤山清光寺 元佐倉村小あり寺領五拾石 天正十九年 浄土宗江府三縁山  
末より奉尊ハ阿弥陀如来開山と月峰上人と云寺能傳ハ天正中二世無算師  
大樹寺殿に御齒骨を負関東下り所々遍歴いたされ一処因縁ありと云  
岩寺に任せられ山内清浄の地を撰み埋葬せられける其後 神君東金  
鷹野に常無算和尚當國在任の由関台まで御舟不付即東金御舟伺  
小羅りので、御齒骨此地に埋葬せられ申上依處御感の上東金より當山  
御入りと能あり御一宿遊ては御舟齒骨御廟御系治法墓と云ふに厚



朴と植うゑをせしむるの末ハ子孫長久の基瑞祥の靈樹れいじゆたるを佐々氏ささに傳  
 へしと云く五垣ハ慶長中土井家つゐにて建立せしむるを代々佐倉領主持  
 たり城中大塚と字せし他小清水と云  
 ちり万代殿供養の用にありしと云

同所藏佛阿弥陀如来銅像背面識 長一尺  
 六寸許

橋氏女橋

同觀音銅像背面識 長一尺一  
 寸五分

貞智光念菅厚田阿定阿道阿

順阿

慶範并妙圓感助定慶手代恒阿  
日代生阿

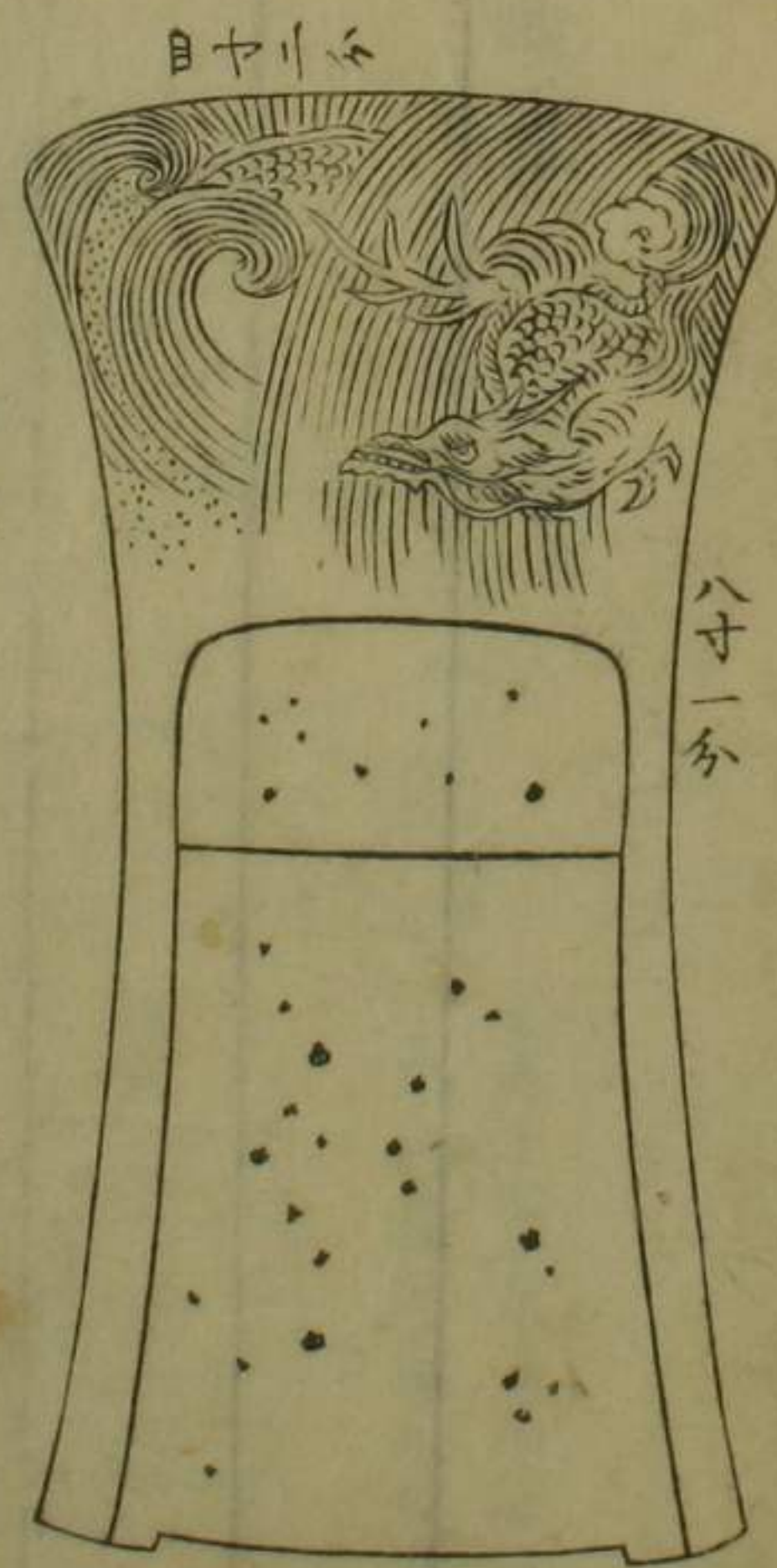
沙弥西心

正安二年九月日願阿道田

平氏女

待モア道阿

同所藏古硯 石質金眼アリ



常森山勝胤寺

大佐倉村あり寺領廿石

天正十九年  
 辛卯十月

禪宗曹洞派土室

祥鳳院末なる本尊釋迦如来開基享祿元年千葉介勝胤

天文廿二年開

城ちやう中千葉家代々の墓碑數基あり勝胤以

来の志を以て鑄字ちゆうじをなすに其詳なることハ知る處しるゝらば庭内小池

あり千葉水と号し一古杉ありと云と掩おほへり

當時寺領七十五貫文附つけし  
 残欠の古簿ふるぼろのすまは佐倉風土記見ゆ

地藏堂鰐かま口識

鰐かま口

壹箇

總之下州印播郡大佐倉村常森山境内地藏堂



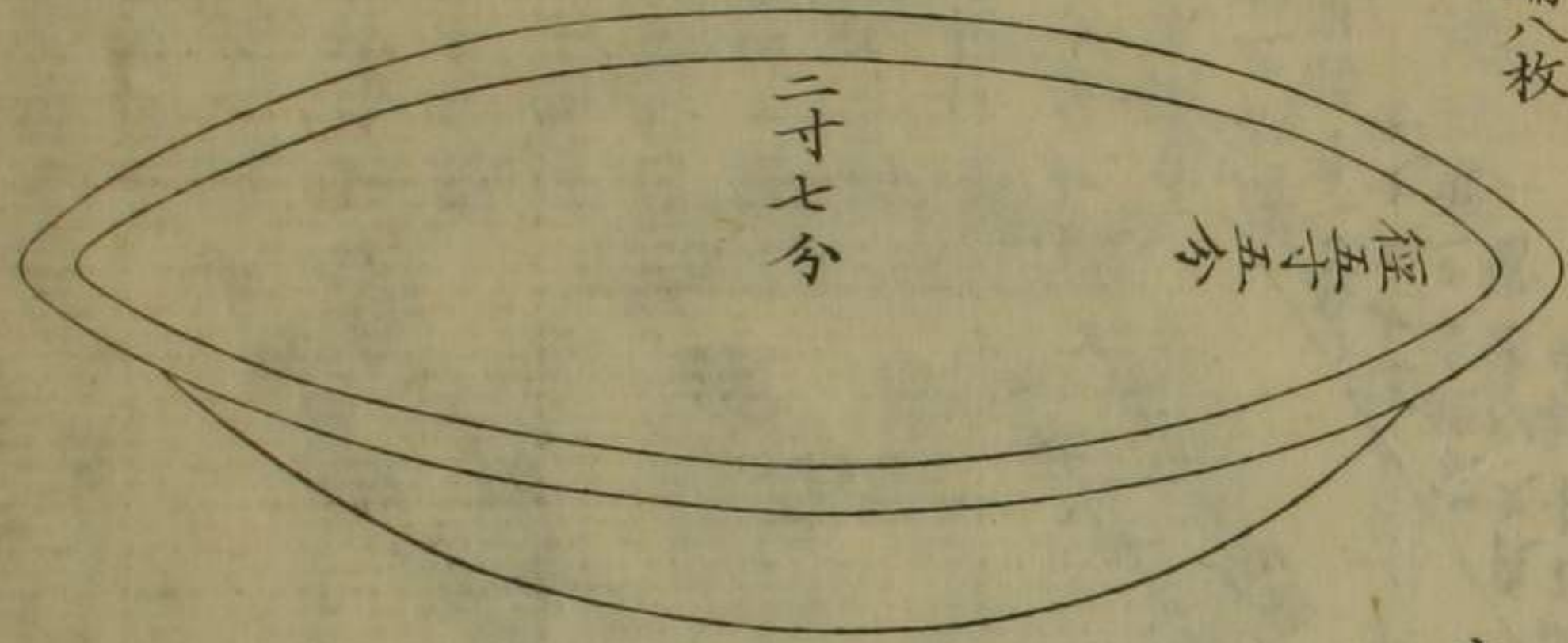
所藏教授文 黃銅筐入此三行其一班  
八寸三分

教授文

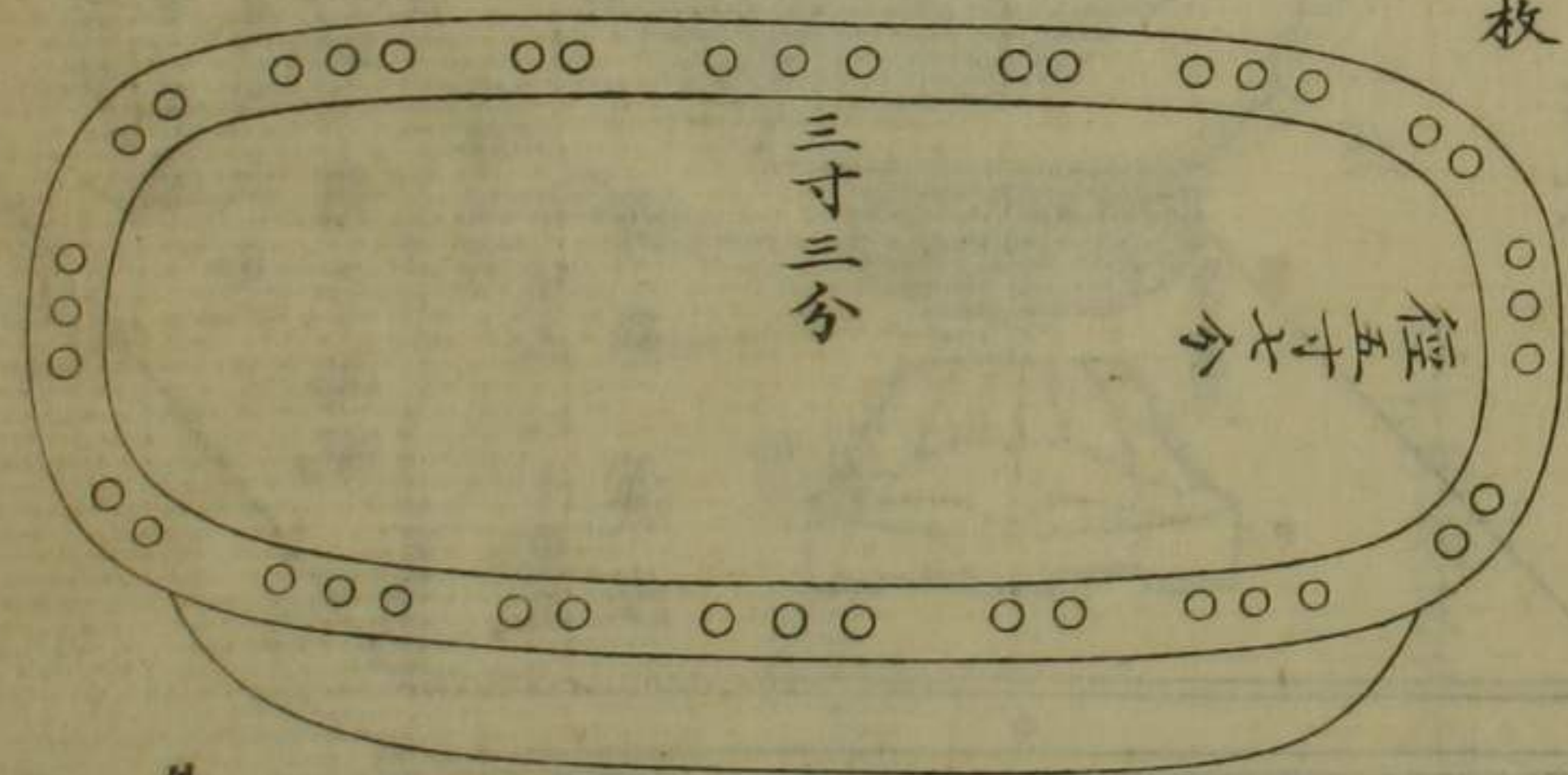
夫諸佛大戒者諸佛之所護念也。有佛、相授有祇、相傳。嗣法超越於三際。證契連綿於古今。吾大師釋迦牟尼佛。陀附授吾迦葉。

千葉家陣皿 地金真鍮 至テラスシ

真鍮八枚

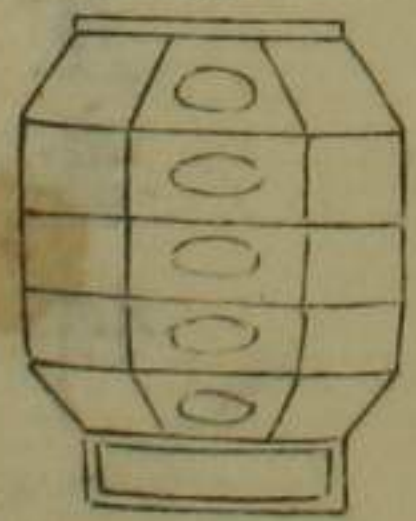


真鍮十枚



朱漆沈金三重高八寸徑八寸  
上唐繪樓閣人物中種繪

組重



底

從五位平朝臣

勝胤寺公用 徑寸

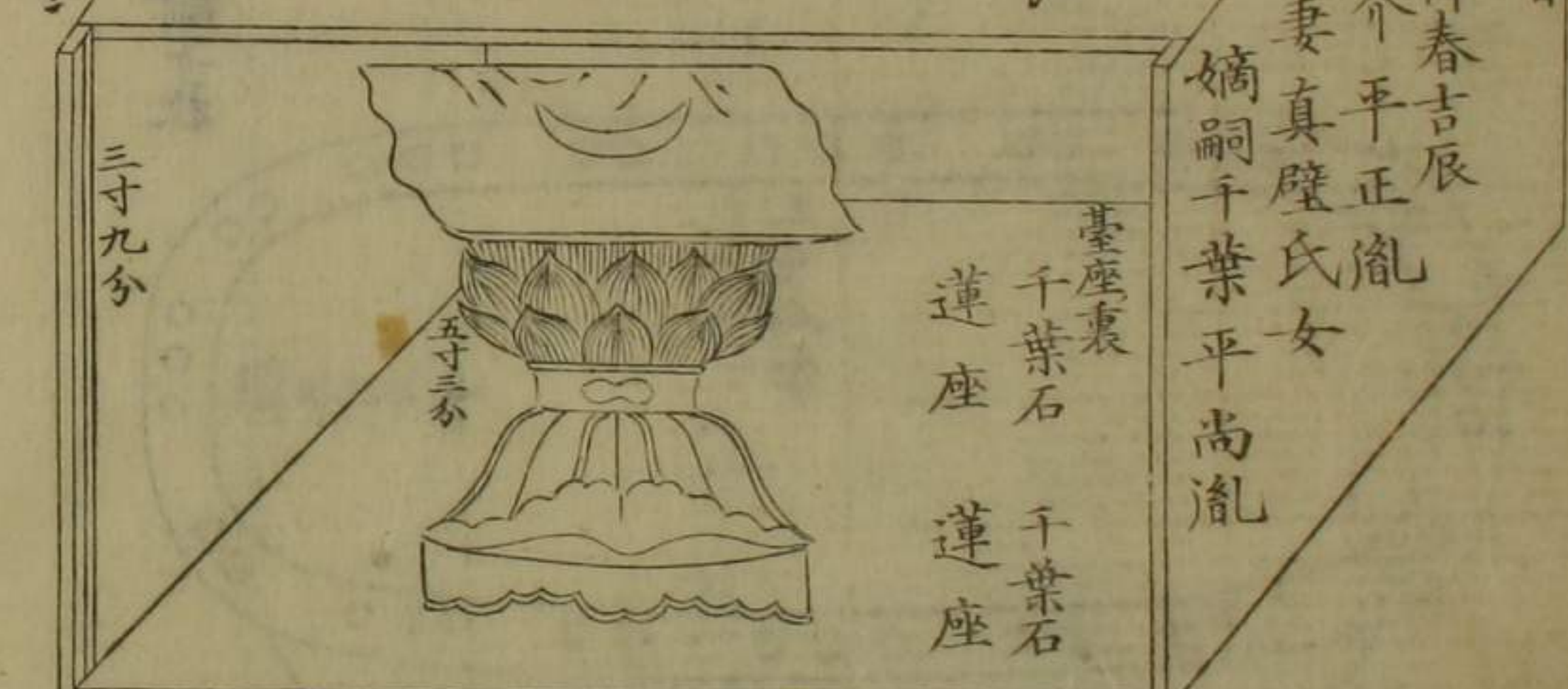
笏室置之

外  
九穴貝 石濱栗 龍馬角  
天狗爪 漆付細口ホアリ



石澄文者非也  
 且其以安石  
 運新伊藤光  
 信工議而和  
 常村字與十  
 紀寺未於  
 寺納勝王  
 大重  
 器也  
 家文者  
 良石  
 此葉  
 十

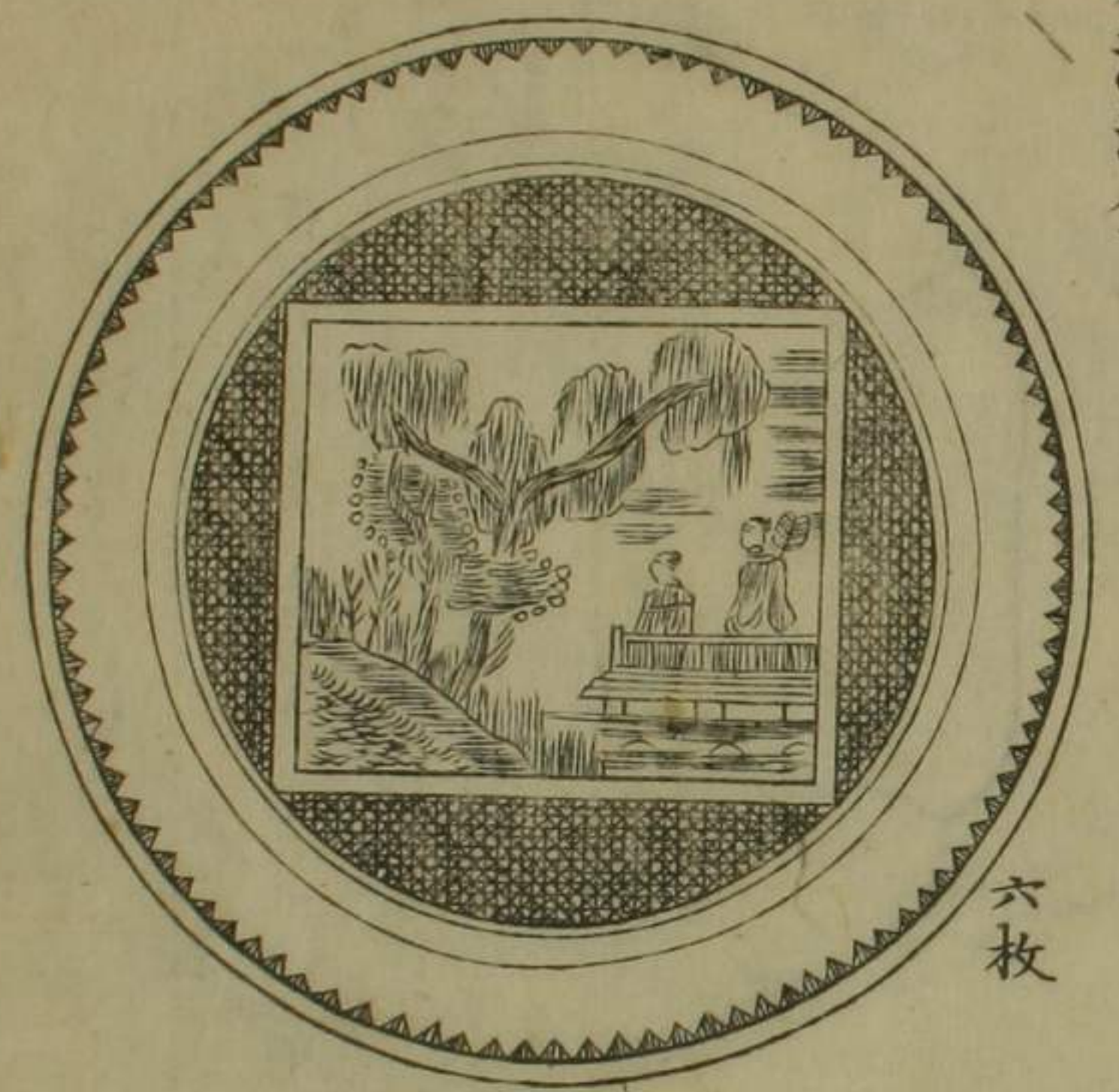
在予家  
 寬文壬子仲春吉辰  
 千葉介平正胤  
 妻真壁氏女  
 嫡嗣千葉平尚胤



蓋裏  
 寄納銅函式箇  
 千葉石  
 常森山勝胤寺

同木皿

朱漆沈金 徑五寸



外六枚底  
 朱漆沈金繪亦異ナリ

底  
 勝胤寺  
 鐫木長門  
 墨之

徑三寸二分



鏡

徑三寸九分  
厚一分五厘



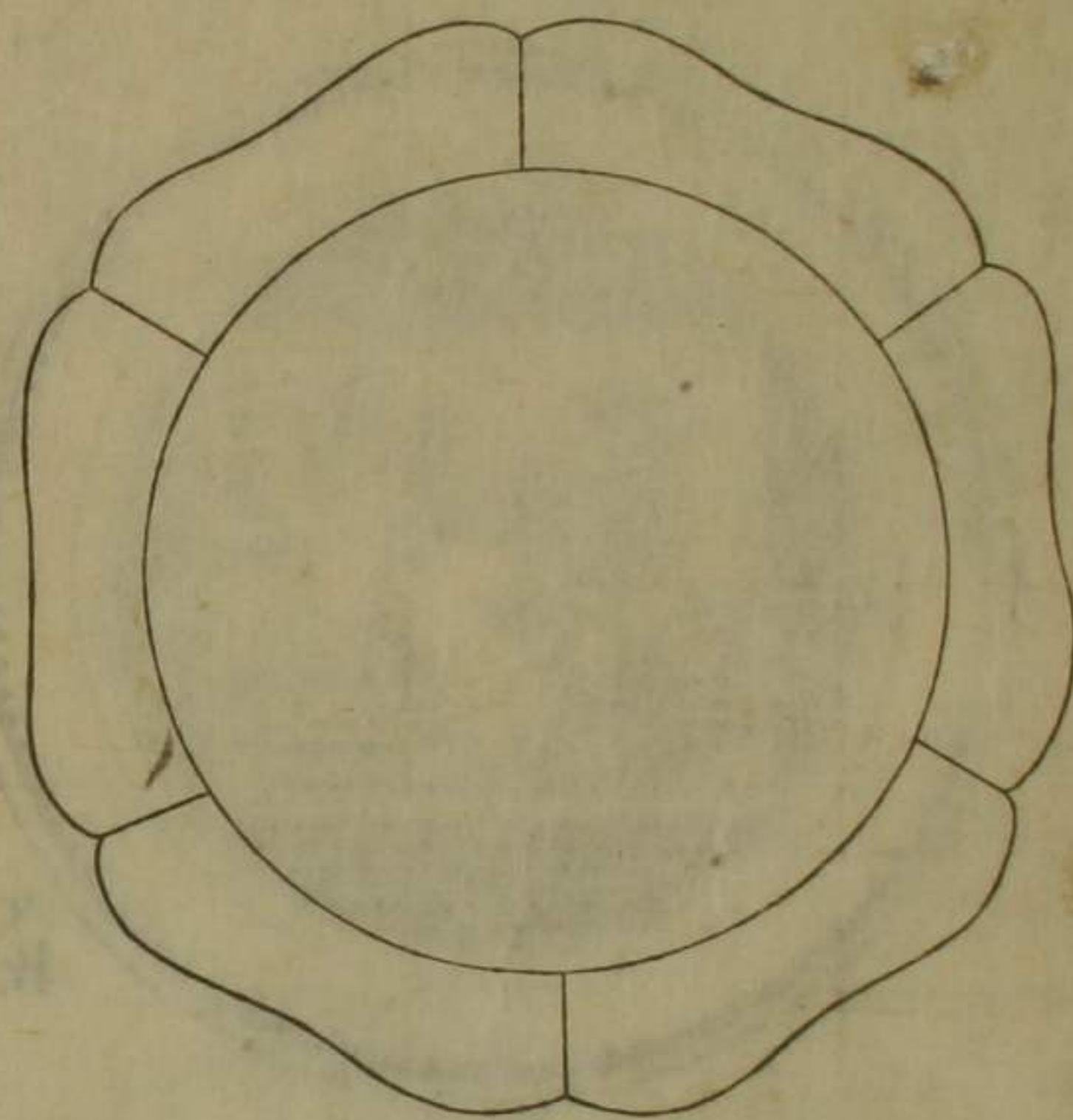
瓶子

二尺

外ニ徑一尺五寸ノ丸キ坐蒲團ノ如キ切テリ當四錢形ノ  
縫ツラシアリ祖芳ノ遺物ナリト云

朱漆八枚

徑三寸四分



底

勝胤寺

巽

楠木長門置之

徑二寸六分





○成田参詣記卷四

○里一

本佐倉町正谷山  
長勝寺 鯨口 徑寸七分

福徳二年、延徳三年  
ナリ頭白ハ常陸小田ノ  
一族下総ニ掛錫シ香取  
郡大根村ニ文明十八年  
逆修ノ碑アリ頭白ハ常  
仙雜話ニ詳ナリ  
或云瓜連常福寺過  
去帳享祿元年戊子  
三月朔日大田極樂寺  
開山虚海寂虚海称  
頭白上人トアルト和光  
院年代記ニ村松ヲ再  
興セシトハ確説ナリ小田  
ノ族タルハタシカナラズ  
常仙雜話ハ東國戦記  
ノ類ニテ証トハナシカタシ





成田参詣記卷四



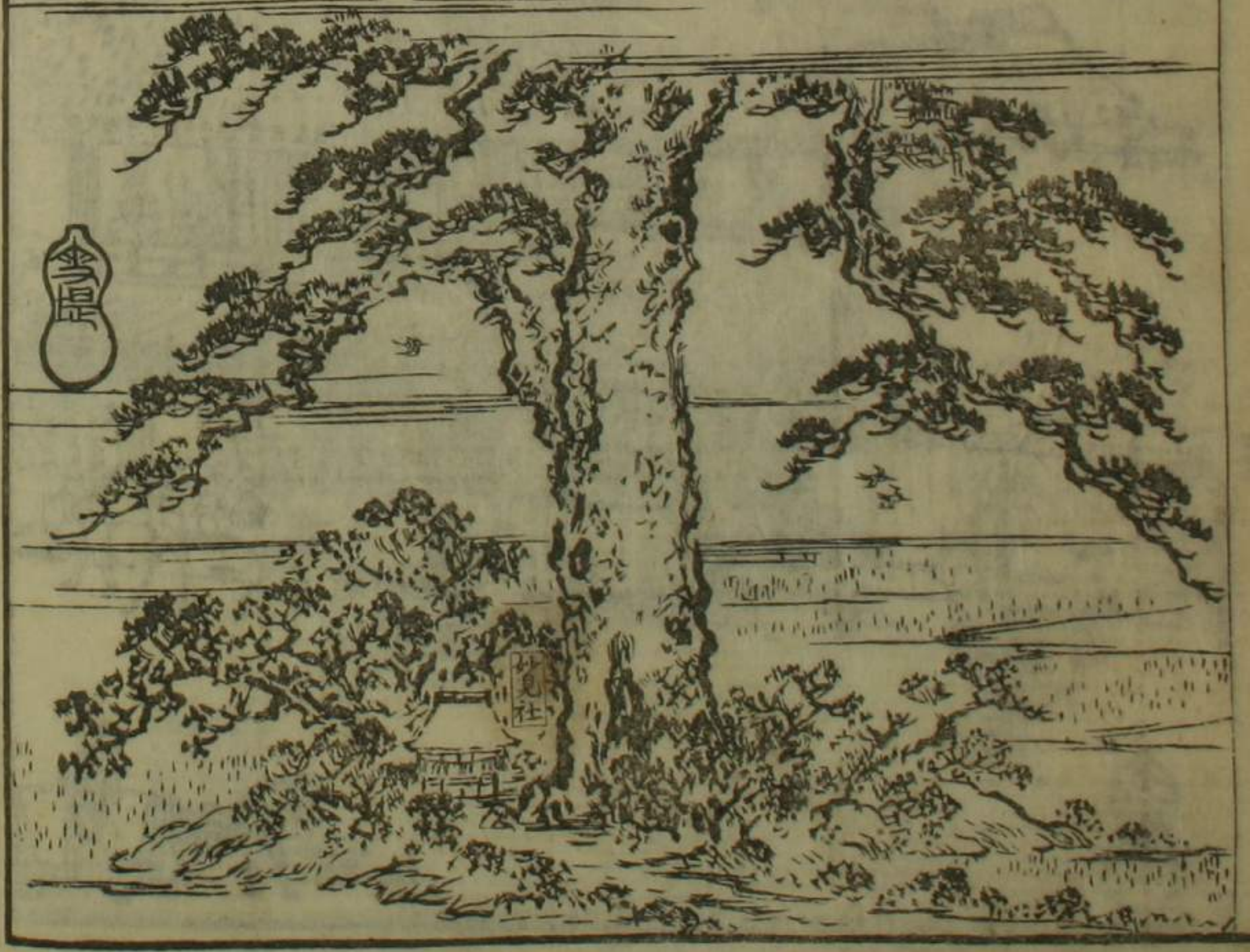
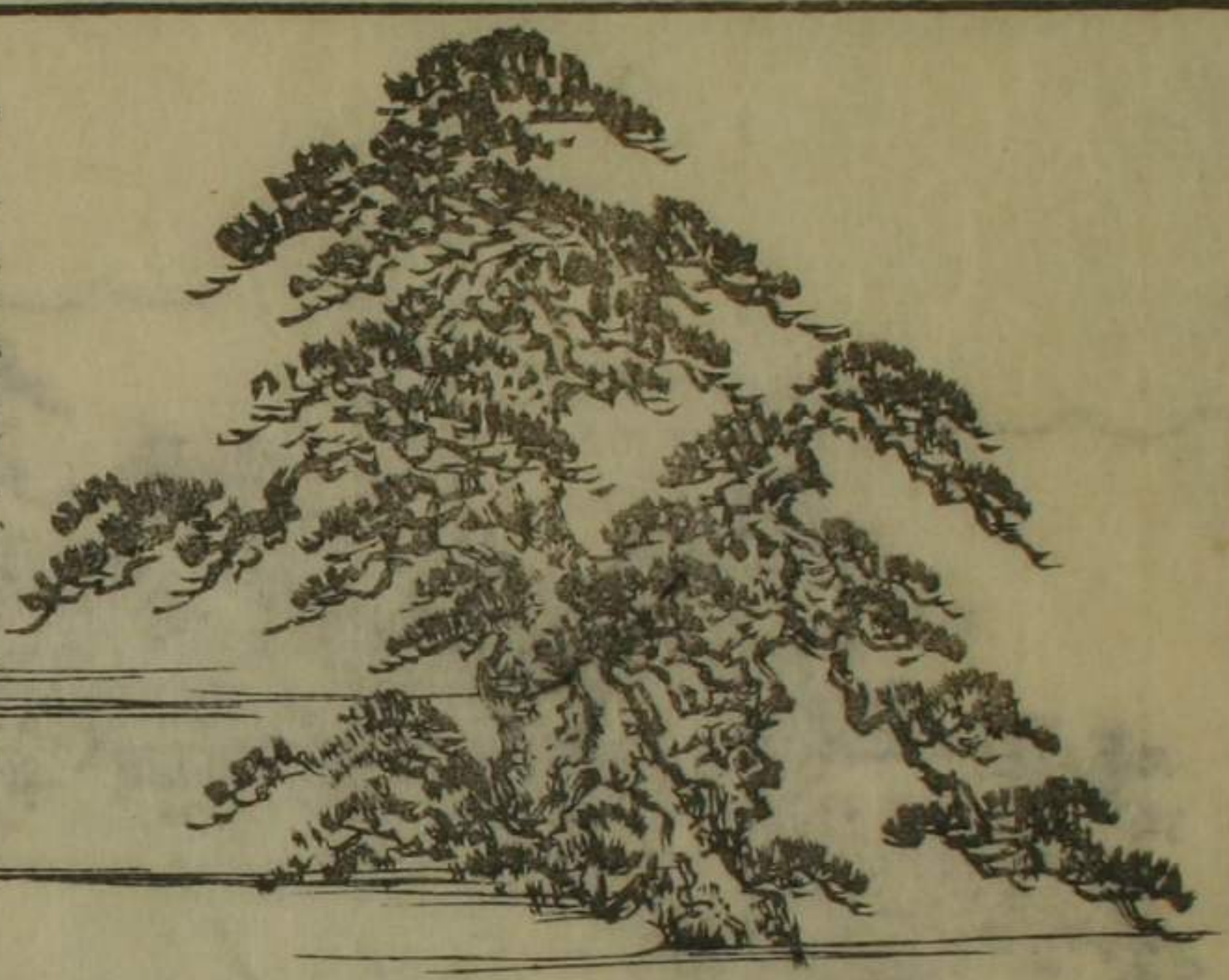
○里

酒しゅ井い驛えきの圖





酒之井驛妙見社傍老松  
 信小肥前坂八抱松と云



印播沼 沼のあらは湖なり江など  
 郡名とむなしく沼の頭に稲葉村あり井物  
 川の川上には 是より買せたる名之源八数條あり一戸神平戸に間より来  
 あり 里一六林佐山の間より来を共に舟尾の下より舎一廣六町はる東  
 南の方へ一里と流き師戸にいたり鹿島橋の下より物井川と寄き  
 廣拾二町許とを是より東北の方へ一里半と流き平賀小にたり是より  
 北小折き弥張太小を其廣二里むらと印播埴生に二郡小直り安食の  
 地にて利根川へ入る其入川の口凡そ三十間と云沼中噴水穴多あり土人  
 サク子穴と云秋冬の文鰯魚水能温氣を好む此小集る故名はくと大なるハ  
 吉高を下小二所安食の下に七所あり漁人試小竿と豎より力を極めて投す  
 る小水清みおれとも其影とらんずる程より暫して浮出とつりも餘程深  
 ることく見ゆ大さる孰も一二間四方なり常小水とふき出たる絶社  
 とも水能上へ揚る程小あらは夏日遙兩社をり沼上小陰火あり或聚り



中川 望むの園  
中川 望むの園  
望むの園

苔清水

こくおらね

水を尻

とられんま

院むは

湯ふ

こしめ也

市わ

魚貫



金印

中川

此地每家井水  
噴出清冽愛  
ふ

筑波山



成田参詣記卷四

四



或散り忽ち遠く忽ち近く亦一奇觀之

○佐倉風土記云江之為景不宜于平者蘆荻遮望也而宜于登覽矣其登覽者平賀為佳飯野次之畑收水澄一鑑萬頃環浦之山如揖如坐如走如駐翠屏畫開者平賀之望也浩々大江一條鎔銀以為長帶水匹練沙禽飛鳴風和日斜而面富士峰于其千里表者飯野之眺也凡環江村三十神也保品也青菅也先崎也白井也土浮也萩山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八代也大竹也酒直也安食也俱連印東而起於乾饒于兌離震以終于北為船尾也松崎也吉田也巖戸也師戸也鑷刈也瀬戸也松蟲也萩原也中根也笠神也皆連印西而起終回繞於印東為

佛林山淨泉寺 印播郡伊篠村あり曹洞宗常陸國多賀郡杉室大雄院小属に開基粟飯原胤光開山斷江周恩和尚 明名四年乙卯 本尊十一面觀

音八粟飯原豐後守胤光 一亂長小作を以て 守布多をり延徳二年康成八月

十八日建立す周恩として寺をたじむ 周恩は杉室の二世也 此寺其をり八周院と云と千葉補胤の時 此時馬加康胤の系事を取りしと見え文書も胤胤より常釋 僧は壽星位持云 此僧もと大権院小位持に 當時伊篠八胤光の居り地と見え胤光死後子右衛門三郎胤信周心院と改又法名をもて寺号とせ

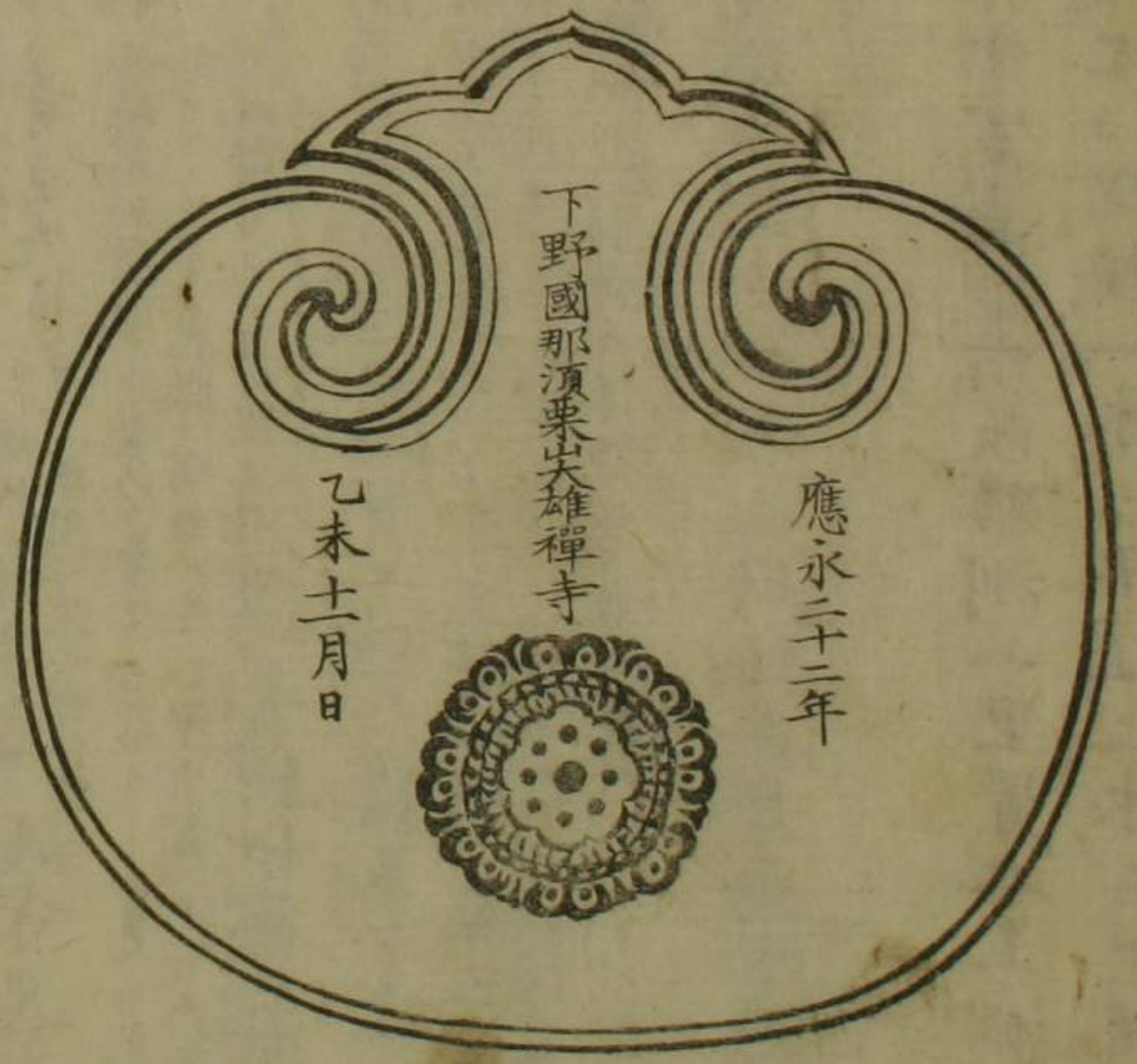
○伊篠の並本と查進並本と云 此地在道新田と稱は此人の 土井家の代官かりと云

延喜式諸國騎路邊植果樹令往還人得休息若無水處量便掘井云

○甲斐叢記卷三 北史韋孝寬為雍州改路測一里置二土墩處植椶代為周文帝令天下效之一里植一木二里植二木百里植百木



淨泉寺所藏銅雲版  
 豎一尺五寸七分  
 横一尺四寸三分



下野國那須栗火雄禪寺

應永二十二年

乙未十月日

寛文十庫戌歲夷則日過去帳叙ニ天文廿三年甲寅七月吉日淨泉院寄進粟飯原イナノ  
 胤満開基寄附之守本尊之後背ニ如是朱漆ニ書付有之也トアリサレト今ハ差コミナシ

列觀經

基坐ノ裏圖ノトキ  
 識アリ妙觀ハ胤光ノ  
 母堂ニヤ



長一尺許

背ニ圖ノ如キ指ロアリ  
 此處過去帳佐倉風土記ホニ擧タル識語付シ  
 サシコミ有シナルベシ



印東庄伊藤少村事  
栗飯系豊及入道浄泉  
仍上与周心院於上成  
菩提所次普光寺  
二宗比丘尼如每之加  
扶持世世相子孫之  
不之有也遠之狀也  
明德二  
十一月九日常輝  
栗飯系忠及入道及

成田参詣記卷四終

相守亥父左也將監之色  
依下金山并標以神字  
寺但例可之領念河  
庶念寺領伊藤少村  
事周心院以寄進是  
又之有也遠之狀也  
永正六年九月末福光集  
栗飯系忠及入道及

寶元  
尾張屋藏

竹口貞齋刻



